

# 愛知医科大学学報



平成30年度医学部卒業記念品  
壁掛け時計（大学本館101講義室）



平成30年度看護学部卒業記念品  
マイセンプラーク「花と鳥」（医心館3階）  
（関連記載8頁）

＝ 第154号 ＝

2019. 4月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1  
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス  
[www.aichi-med-u.ac.jp](http://www.aichi-med-u.ac.jp)

## ■ 主な目次 ■

平成31年度入学式	2
平成30年度卒業式	5
祖父江理事長所信表明	9
私立大学研究ブランディング事業採択	9
平成31年度予算大綱	10
就任ごあいさつ	14
教授就任インタビュー	20
定年退職教授最終講義	36
退職を迎えて	38
地域がん診療連携拠点病院・がんゲノム医療連携病院に指定	40

# 平成31年度愛知医科大学入学式

## 医学部・看護学部入学式



平成31年度入学式が、平成31年4月2日（火）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて挙行されました。【写真】

式は、君が代斉唱に始まり、続いて、佐藤啓二学長から告辞があり、医学部116名、看護学部101名計217名の新入学生を代表して看護学部の桑原瑠菜さんから「学則並びに諸規則を守り、先生方の御指導に従い、本学学生としての自覚を持ち勉学に励むことを誓います。」と宣誓が行われました。

その後、来賓の祖父江元 理事長、加藤政隆医学部父兄後援会会長、浅井富成医学部同窓会会長から祝辞が述べられました。

最後に、医学部6学年次生の加陽直貴さんから「医学・看護学は日進月歩であり、覚えなければならないことがたくさん出てきます。ただ覚えるだけでは、恐らくその

速さに付いていくことができないかもしれません。だからいつも『なぜ』と考える習慣を身に付けてください。考えながら覚えることが大切です。頑張った分だけ結果が付いてくると思います。困難に直面しても、決して一人で悩んだりせずに、信頼できる先生方や仲間に頼ってみてください。同じ目標を持った高め合える仲間がいることを忘れないでください。きっと、自分自身が納得できる答えが見つかると思います。最後になりますが、在学生一同、皆さんの学生生活が有意義で価値のあるものとなることを心から願い、皆さんと一緒に大学生活を送れることをとても楽しみにしております。」と歓迎の辞が述べられ午前10時40分頃に式は終了しました。



宣誓を述べる桑原さん



加陽さんからの歓迎の辞

## 告 辞

### 学 長 佐 藤 啓 二



医学部116名、看護学部101名の皆さん、入学おめでとうございます。ご父兄・関係者の皆さま、本当にお慶びのことと思います。皆さんは、一生懸命勉強し、国家試験に合格し、

国家資格を身に付けるという大望があると思います。

孫氏の兵法「謀攻編」に「彼を知り、己を知れば、百戦危うからず」とありますので、大望を成就する為には、現在の医学・生物学はどのような学問かを知り、どのように向き合わなければならないかを知ることが重要です。

本庶佑先生が大学生の1962年頃、物理学を専攻している秀才のN君からこう言われたそうです。「現象論の記載ばかりやっている生物学や医学は二流の学問であり、科学と呼ぶに値しない。」本庶先生は「物理・化学の技術・方法が高度になり、生物材料の分析技術が進むならば、生物学も定量的になり立派な自然科学になるはずだ。」と反論したそうです。では、医学や生物学はどこまできているのでしょうか。有名な科学雑誌であるScienceが毎年優秀論文を10編選び、その中で最優秀論文を

Breakthrough of the yearとして選考しています。2018年に選ばれたのは「セルによるセルの開発」です。これだけでは何のことかわからないと思います。

個々の細胞の中で、遺伝子読み取りがされ、どんなmRNAがどれだけ産生されているかはトランスクリプトーム解析で可能になっています。それだけではなく、生命現象を営む細胞集団でどの部位の細胞がどんなmRNAをどれだけ産生しているか、隣接した細胞がどのような影響を受けどのようなmRNAをどれだけ産生していくか立体的把握が可能となっており、更に時間経過を含めた四次元解析も可能となっています。

産生されたmRNAの質や量の近さについて、クラスター解析手法を用いて二次元や三次元で可視化することも可能となっています。生物学では「鳥の渡り」について、地磁気を利用していることが分かっていますが、その感知システムについて、量子生物学が応用されています。皆さんが良く知っているPET（Positron Emission Tomography）は、量子物理学が応用されています。つまり最先端の科学技術が医学・生物学に集中投下されて

いる時代です。その結果、情報量はどうか、情報の回転速度はどうか、みてみましょう。

我々 Homo sapiensが系統樹で別れた20万年前から、皆さんが生まれる直前の1999年まで、総情報量は $1.2 \times 10^{18}$ byte (エクサバイト) でありましたが、2020年までの20年余りで、3ゼタバイト ( $3 \times 10^{21}$ byte) となる見込みです。つまり総情報量は3,000倍になるということです。医学・生物学領域に限ってみると、アメリカ国立医学図書館が出している情報検索サイトであるPubMedによれば、「2015年には単年で360万論文が出されており、積み重ねると厚さ800mであった。2050年まで積み重ねると100kmに到達し、成層圏をはるかに超える」とされています。情報量が指数関数的に増加しています。

更に、ある情報が価値を持って世の中に出てきますが、その価値が失われるまでの、Evidence生存期間はわずか5.5年と言われています。医学部に入学された皆さんが、入学直後に新しい情報を得たとしても、卒業までにその価値が失われることになる可能性があります。指数関数的に増大する情報を身に付けることはとてもできないし、身に付けたとしてもその価値が失われるのであれば、学ぶ意味がないと思うかもしれません。

ではどうして学ぶのでしょうか。1970年数学のノーベル賞と言われるフィールズ賞を受賞された広中平祐先生が、講談社ブルーバックスに「学問の発見」という本を書いておられます。本当に良い本ですので、是非一読してみてください。その中に、「学ぶことによって知恵が作られる。知恵という目に見えないが生きていく上に非常に大切なものが作られる。」と書いてあります。更に、「学んだことは、しばらくすると忘れてしまう。しかし、知恵を身に付けていれば、もう一度必要に迫られて取り戻そうとする時、一度も経験したことの無い人より、少なくとも心の準備くらいはできるし、時間をかければさほど苦労しなくても、そのことを取り戻すこともできる。これを『知恵の広さ』と呼ぶ。更に知恵を身に付けていれば、物事をより深く考えることができる。これを『知恵の深さ』という。知恵を身に付けていれば、物事の決断力を迫られた時に、より早くより正確に決断することができる。これを『知恵の強さ』という。」と書かれています。

皆さんが高校時代にやっていた机の上の勉強を「机上の学問」と言いますが、大学に入ってしばらくすると、全く次元の違うことを学ばなければなりません。患者さんと話をし、情報を引き出したり、患者さんを診察して情報を得なければなりません。画像をみて判断をしなければならぬし、手術に加わって手術方法を学ばなければなりません。

例えが適切でないかもしれませんが、皆さんの高校時代の勉強を「100m走」としましょう。大学に行き学修は、「走る、飛ぶ、投げる」を行う10種競技かもしれません。ひょっとすると「800m走って射撃をし、泳いで、フェンシングをして、乗馬をする近代5種」かもしれません。私は100m走をして、ほぼ同タイムでゴールインしてきた皆さんの中に2種類のグループがあ

ると思っています。最初のグループは、「100mは距離も限られていて真っ直ぐだ。100mダッシュをすると、筋力が付き、瞬発力が高まり、スタートの合図に対する反応性も良くなるので、1日100mダッシュを20本、30本繰り返し、タイムを短縮し、合格ラインに到達した」人達です。次のグループは、「100mは距離も限られていて真っ直ぐだ。しかし左右にぶれたり、上下にぶれたりするとタイムロスをする事から、ぶれないフォーム作りの為に、脚の上げ方、足の着き方、上体の傾き等をいろいろ調べて最適化する。早く走る為の体重移動の最適化を同じように調べて最適化する。どの筋肉を使うか、それをどのように訓練すれば最大の効果が得られるかを調べて最適化する。栄養もそうです。疲労が蓄積しにくいトレーニング方法や、疲労を早く解消する為のリハビリテーションの方法を調べて最適化する。このような工夫をしてきて、タイムを短縮し、合格ラインに到達した」人達です。

大学に入学して、違った種目である走高跳をやらなければならなくなった時、最初のグループは、ひたすら高く飛ぶ訓練を繰り返すこととなります。後のグループでは、早く走る為の体重移動の最適化は、高く飛ぶための体重移動の最適化に、部分的に置き換えることができます。どの筋肉を使うのかが分かれば、それをどのように鍛えていくかも置き換えることができます。栄養についても応用が利きますし、疲労が蓄積しにくいトレーニング方法や疲労を早く回復させる為のリハビリテーションの方法は、そのまま応用できます。それは単に「知識量」が増えただけではないか？と思う人もいるかもしれませんが。目的は一つであっても、克服すべきチェックポイントを見出して、情報を集めて分析し、最適解を求めていく、そのアプローチの方法が「知恵を身に付ける」ことです。

更に、生きる為の知恵もあります。非認知能力といえます。IQや学力テスト等数値化できる能力以外の「誠実さ」や「忍耐力」、「リーダーシップ」、「コミュニケーション能力」等があります。これは集団生活の中で身に付けていくべきものです。つまり、大学で学ぶべきことは、「学修課程で知恵を身に付け、集団生活の中で生きる知恵を身に付ける」ことです。

皆さんはiPS cellを知っていますよね。Inducible pluripotent stem cell 日本語訳は、「誘導しうる多機能幹細胞」です。私は皆さんのことをiPS personと思っています。日本語訳は「成長する多才な中核人材」です。その為には、自らreprogrammingしてもらい必要があります。学修課程で「知恵」を身に付けること、集団の中で「生きる為の知恵」を身に付けるreprogrammingです。

是非、知識ではなく、知恵を身に付けて、一人も落ちこぼれることなく卒業し、国家資格を取得し、社会に貢献しうる中核人材になって頂きたいと思います。がんばってください。

## 祝 辞

理事長 祖父江 元



愛知医科大学理事長の祖父江でございます。このたびは、医学部・看護学部で晴れて御入学された学生諸君と保護者の皆さまに心からお祝い申し上げます。誠にありがとうございます。

愛知医科大学は1972年に建学され、まずは医学部ができて、2000年に看護学部が創設されました。本年は、開学47周年を迎えており、開学50周年も間近に迫っております。本学の建学の初期には、必要な資金なども不足していたということもあって、幾多の難題に立ち向かわなければなりませんでした。先人の大変なご努力と熱意により、少しずつ本学は発展して参りました。

約10年前からは、キャンパスの再整備が進められてきておりまして、中でも新病院の建設は5年前に完成し、昨年度をもって本学全体のキャンパス再整備は、ほぼ完成しております。病院の医療設備も大変先端化しており、アメニティー施設や周辺の道路なども整備されてきており、10年前とは見違えるような環境になっています。本年の9月には、医学部では医学教育分野別評価を受けることになっており、臨床実習に重きを置いた国際基準にマッチした教育環境の新たな整備が行われようとしています。皆さんは、10年前には想像もつかなかった新しい教育環境の整った大学に入学して頂きました。

本学は、新病院を始めとした教育・診療・研究環境のハード面は整ったところであります。しかし、今後の更なる飛躍・発展を目指すには、その中身やシステムや人の力を更にどう高めていくかであると思います。今、まさに次の発展に向けた新たなフェーズを迎えていると思います。社会から信頼され、我が国をあるいは世界をリードできる愛知医科大学をどう作っていくのかが問われていると思います。

しかし、一方では、我が国の私立医科大学は、医療全体を含めて大変大きな変革の時期を迎えております。これは、そのあり方を含めた大きな変換点を迎えているともとれるわけでありまして。これは見方を変えれば、この変化を捉えて、本学の次の発展に繋げる大きなチャンスでもあると思っております。是非宜しく願い申し上げます。

本学の今後の発展を支えるキーワードの重要な一つは、イノベーションとそれを進める人ではないかと思っております。イノベーションとは、今までとは違う、新しい領

域の開拓や新しい価値の創造に向けた挑戦という意味です。挑戦しながら進化していこうという意味が込められておりまして、大学全体のイノベーションもあれば、それぞれの個人の中での進化を求めるイノベーションもあると思います。

大リーグのイチロー選手が先日現役を引退しました。彼は名古屋市の北部にある豊山町の出身で愛工大名電高校からプロの道に入った、元は名古屋人であります。彼のスタイルは、決して大ホームランを打ったり、奇策で大向こうを唸らせるプレイではありません。内野ゴロと見間違ふような打球でもヒットにしてしまう脚力、相手の守りの間を見事に抜く素晴らしいバッティング、俊敏な走塁、レーザービームのような外野からの返球、ホームラン性の打球をアウトにしてしまうフィールドワークの凄さ。気が付けば、シーズン200本安打を10年間続け、トータル4,000本安打を超え、3割を大きく超える生涯打率をマークしています。それは、大リーグの伝統的なホームランバッターではない彼が、大リーグのこれまでの常識を変えて、ホームランによる力の野球とは異なる新しい野球のあり方を示したと感じますし、これに対する世界の驚きと賛辞が含まれているように思います。彼のとことん追求された技術の確かさと新しい野球の領域を開拓したというオリジナリティーの凄さのように思います。

以前米国のオバマ大統領が彼に、なぜあのようなレーザービームのような返球ができるのかと聞いていますが、彼は筋肉を柔らかくすることだと少し外した答え方をしており、それに対してオバマ大統領は日本の禅のようだと驚いています。私は、野球は全くの素人ですが、これはまさに野球における新しい領域の開拓でありイノベーションであると感じます。本学の次の発展には、このような今までの価値に捉われない新しい領域の開拓と価値の創出につながる挑戦、イノベーションが必要です。それには、イチロー選手のような柔らかい筋肉と柔らかい頭を持ち、イノベーションに挑戦する人が必要です。

私は、イノベーションを目指す心は、個人や組織を変革し、発展させるにはどうしても必要だと思っています。私は、特に失敗を恐れない諸君のような若い人に期待したいと思っています。私は、「トライアンドエラー」のエラーの方にむしろ力点があるのですが、大いに結構だと思います。私たちも本学の更なる発展を目指して頑張っていきたいと思っておりますが、諸君も本学で、思い切り挑戦してみてください。きっと良い道が開けてくると思います。

改めて、本日はおめでとうございます。

## 大学院入学式

平成31年4月2日(火)午前9時20分から大学本館711特別講義室において、平成31年度大学院入学式が挙行されました。【写真】

式は、看護学研究科修士課程14名、医学研究科博士課程46名の計60名の新入学生が紹介された後、新入学生を代表して医学研究科の豊國賢治さんから「学則並びに諸規則を守り、先生方のご指導に従い本学大学院学生としての自覚を持ち勉学に励むことを誓います。」と宣誓が行われました。

続いて、佐藤啓二学長から告辞が、祖父江元 理事長から祝辞が述べられ式は終了しました。



# 平成30年度愛知医科大学卒業証書・学位記授与式

## 医学部・看護学部卒業証書・学位記授与式



平成30年度卒業証書・学位記授与式が、平成31年3月2日（土）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて挙行されました。【写真】

## 告 辞

### 学 長 佐 藤 啓 二



医学部107名、看護学部107名の皆さん卒業おめでとうございます。ご家族・関係者の皆さまもさぞお喜びのことと思います。卒業生の皆さん、愛知医科大学が「教育において根幹となる考え方」として定めた学是「具眼考究」は身に付いていますか？

「具眼」とは、「つまびらかにみる」ことで、観察・看護・見学・視野・診療の五つのみという漢字が含まれています。この「五つのみ」を通して得た情報を、病気だけではなく、患者さんの家族構成や社会背景を含めて、最適解を出すことが「考究」です。

皆さんは本日社会へ巣立つことになります。そこで私は、「みる」とも読む六つ目の漢字「察」を加えたいと思います。何を察するのか、それは二つあります。一つ目は「人口動態の変化による影響」を察してもらいたい。そして、二つ目は「産業革命の影響」を察してもらいたいということです。

人口動態の変化については、2008年に1億2,800万人でピークを迎えましたが、2011年以降毎年20万人ずつ減少し、2016年は30万人減少し、2017年は40万人減少しました。皆さんが社会を支え、活躍する2040年から2060年の間には、毎年90万人減少すると予測されていますが、これは、香川県もしくは和歌山県が丸ごとなくなってしまう数です。

特定機能病院や地域基幹病院は機能を維持して残ると思われますが、中小病院は統合や機能変換を余儀なくされる可能性があります。また、高齢化が進行しますので、高齢独居の問題、認知の問題等、在宅者が増加します。そこで、在宅・家庭医療の重要性も増してきます。急性期医療に含まれず、専門診療にも含まれることが少ない、フレイル（虚弱）、サルコペニア（筋肉減少症）、栄養・嚥下・IVH、認知、緩和ケア等、ニッチな領域の知識や技術を有しておくことが重要です。

式は、君が代斉唱に始まり、佐藤啓二学長から医学部107名、看護学部107名の卒業生一人ひとりに卒業証書・学位記が授与されました。

続いて、佐藤学長から告辞があり、来賓の祖父江元理事長、柵木充明愛知県医師会会長、加藤政隆医学部父兄後援会会長、浅井富成医学部同窓会会長から祝辞が述べられました。

この後、在学生を代表して看護学部3学年次生の森田絵万さんから送辞が、卒業生を代表して医学部の長嶋愛さんから答辞が述べられ、卒業記念品の贈呈が行われ、午前11時20分頃に式は終了しました。

二つ目は「産業革命の影響」です。第一次産業革命は、製造工程の機械化でした。第二次産業革命は、内燃機関と電気による大量生産時代でした。第三次産業革命は、コンピュータによる自動化とインターネットでした。これまでは省力化も進みましたが、全体として雇用機会を増やすことにつながっています。第四次産業革命は、ロボティクスとAI（人工知能）です。経済産業省は、第四次産業革命が医療・ヘルスケア分野にもたらす影響として、個人の遺伝素因に合わせた最適化医療、Precision medicine型へのパラダイムシフトが生じるとしています。産業界では既にM2M（machine to machine）と言われ、人手を必要としない自動化が進んでいますので、雇用機会の減少は必然です。例えば、銀行・証券・保険等の金融業界では、現在においてすら、多数の人員削減計画が進行しています。

医療界も例外ではなく、アメリカの医療現場の実証実験では、患者の診断や薬の処方等に関するプロセスの85%程度は人工知能によって代替できることが示されています。

ではどんな仕事が残るのでしょうか？手術や生体侵襲を伴う検査においては、費用対効果の面から、簡単にロボット化することはできないと思われます。医師や看護師の専門技術が必要であることは間違いないと思いますし、患者に寄り添い、理解し、共感する「人間力」が求められることは変わりがないと思います。

是非、最新医療技術を身に付け、人間力を磨いてください。「未来を察する」ことができれば、百戦危うからずです。

愛知医科大学の在学生が皆さんのことを誇りに思えるよう、社会で活躍してもらいたいと思います。更に、発展し続ける愛知医科大学をAll Aichi Idaiとして、支援して頂きたいと思います。

皆さんの輝かしい未来にエールを送り、告辞といたします。

## 祝 辞

理事長 祖父江 元



本日は医学部、看護学部の課程を無事終了され、ここに卒業式を迎えられた学生の皆さん、それに保護者の皆さまに、理事長として、心からお祝い申し上げます。おめでとうございます。

ございます。

学生の皆さんがこの晴れの日を迎えることができたのは、皆さん自身の努力もさることながら、多くの人の支えがあったからだと思えます。ご家族の方々、先輩や同級生の方々、教員の方々、そして何よりも実習などで協力して頂いた患者さん及びその家族の方々など、改めて感謝の意を表したいと思えます。

学生生活は、思い出深い6年間、4年間だったと思えます。これから皆さんは、社会人として、医療に携わるプロとして新しい生活が始まります。改めて、この門出をお祝いしたいと思います。

私は皆さんに三つのことを申し上げたいと思えます。一つは、これからの研修や実践では、目の前のことで精一杯の毎日になると思えます。しかし一方で、この時期にこそ、是非とも長いスパンで将来の目標を考えてほしいと思えます。「自分は将来何を目指そうとしているのか」ということです。私自身のことを少し言いますと、研修医や大学院の若い頃に考えたことが、その後の長いキャリアの中でいつも深いところで生きていたと感じます。当時は、神経変性疾患（ALSや小脳失調やアルツハイマー病）はほとんど治療法がない時代で、考えたことは、「なんとか神経変性疾患の治療法を見つけられないか。」、もう一つは「神経変性疾患はがんと似ているな。」というものです。今から考えるとほとんど根拠がないファンシーなことを考えていたと思えます。

しかしその後、長らく経って、名古屋大学の教授になってから、ある神経変性疾患の治療法の開発を進めることになりましたし、また、その後の大型研究プロジェクトのテーマが「がんと神経疾患の共通分子による治療法の開発」というものでした。

後から振り返ってみると、あの若い時に考えたことが、その後巡り巡って私の研究者のキャリアの中で生きていくように感じます。若い頃の感性というのは本当に大事であると思えます。初期研修は、患者さんを初めて主体的に診る時で、医学・医療の初めてのアーリーエクスポージャーであり、将来に向けたインスピレーションを得やすいのかもしれませんが。

皆さんは、是非10年後20年後のような長いスパンで目標を考えてみてください。目標を立てることにより、日

常がより活気づくと思えます。また、普段は忘れていても、長いキャリアパスの中で必ず生きてくると思えます。

もう一つは、これから皆さんは、多くの患者さんに接することになると思えますが、患者さんは病気と同時に、家族や生い立ちや仕事や信条や食習慣など、多くのものを背負って生きているのです。医師や看護師のこれらを理解しようとするスタンスが、患者さんが病気と戦う上でいかに力になるかということです。

医師であり、海軍軍人として有名な高木兼寛の言葉に「病気を診ずして病人を診る」という言葉があります。これは全人的な見方が重要であることを言っていますが、一方では、患者の背景を含めて詳細な観察を行うことによって病気の成り立ちや原因にまで迫ることができるということを言っているようにも思えます。

高木兼寛は、ビタミン発見の父と言われている人で、彼がいた明治時代は、脚気が重要な国民病でした。彼は、患者の背景を詳細に観察する中から、麦飯や玄米を食べている患者は少なく、白米を食べている患者が圧倒的に多いことを見出すのです。彼が凄いのは、これを実験で実証するのです。当時彼は軍医で、海軍の軍医総監という立場でしたが、海軍では脚気が多発していたのです。そこで、食事を白米から麦飯に変えて、長い航海を行って実験したところ、脚気の発生が見事に抑えられたのです。これが後に鈴木梅太郎やエイクマンの米糠からのビタミンB1の発見につながったと言われています。

今は電子カルテなどもあり、ややもすると患者を良く観察することが疎かになっていると思えます。患者は全身で病態を訴えており、その中に病態を読み解く重要なヒントを発信しているということを知っていてほしいと思えます。

高木兼寛は、東京慈恵会医科大学の開設者ですが、日本で最初の看護専門学校の開設者でもあり、「医師と看護師は車の両輪の如し」という誠に画期的な言葉を残しています。本日の医学部と看護学部の合同の卒業式には、誠にふさわしい言葉ではないかと思えます。

最後にもう一つ、これは、皆さんへの期待です。皆さんの中から、愛知医科大学の次世代を背負う人が是非出てきて欲しいと思っています。私は、本学は今後更に大きく飛躍していくことが必要と思えます。そのための基本は、人とイノベーションだと思っています。皆さんは、その担い手として本学に是非戻ってきてほしいと思えます。

本日は誠におめでとうございます。皆さんの今後の活躍に期待しています。

## 送 辞

在學生 森田 絵 万



長かった冬の厳しい寒さも和らぎ、日差しに春の暖かさを感じられる季節となりました。このような良き日に、先輩方が晴れてご卒業を迎えられましたことを在學生一同、心よりお祝い申し上げます。

今日ここに晴れの日を迎えられましたのも、先輩方を暖かく支えられてきたご家族の深い愛情や、先生方の熱心なご指導はもちろん、先輩方の日々の努力が実を結んだ結果であると思います。

先輩方は、この愛知医科大学で過ごされた日々を、今、どのように振り返っていらっしゃるでしょうか。希望を胸に門をくぐった入学式、クラブ活動や実習、大切な仲間と切磋琢磨し合った日々。振り返れば語りつくせぬ程の思い出が走馬灯のように巡っているのではないかと思います。

大学生活での様々な経験を通して、改めて命の尊さを学び、医療の道を志した時の夢を、また新たなものにされたことと思います。そして今皆さまは、医療従事者としての新たな第一歩を踏み出そうとされています。

これから先の新たな世界に対して、希望はもちろん、不安もあることと思います。しかし、本学で培われた知識・技術、高い倫理観、強い精神力を糧に、困難の壁を乗り越え、心温かく、信頼のある医療を提供されていくことを確信致しております。本学で得られたものを生涯の宝とし、これからの未来を切り開いていってください。

私たち在校生は、新たな夢を胸に力強い第一歩を踏み出される先輩方の姿をお手本とさせて頂き、残りの学生生活を精進して参ります。

最後になりましたが、先輩方の今後のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

本日はご卒業誠にありがとうございます。

## 大学院学位記授与式

平成31年3月2日（土）午前9時20分から大学本館711特別講義室において、平成30年度大学院学位記授与式が挙行されました。【写真】

式では、看護学研究科修士課程修了者10名、医学研究科博士課程修了者15名一人ひとりに、佐藤啓二学長から学位記が授与されました。

続いて、佐藤学長から告辞が、祖父江元 理事長から祝辞が述べられ式は終了しました。

## 答 辞

卒業生 長 嶋 愛



草木もようやく長い冬の眠りから覚め、生命の息吹が感じられる季節となりました。本日は、多くの方々にご臨席を賜り、素晴らしい卒業式を挙行して頂きましたことを卒業生一同、厚く御礼申し上げます。

今日というこの佳き日に、私たちは愛知医科大学を卒業します。

満開の桜の下、期待に胸を膨らませ、この学び舎の門をくぐったあの日が、今懐かしく思い出されます。愛知医科大学に入学し、私たちは医療者への道の第一歩を踏み出しました。

膨大な知識量に圧倒された講義や試験勉強、ご検体に感謝を捧げて取り組んだ解剖実習、患者さんから多くのことを学んだ臨床実習、そしてそれらの集大成として臨んだ国家試験。これまで幾多の試練を乗り越えられたのは、熱心にご指導して下さった先生方、親身に相談に乗って下さった先輩方、私たちに慕ってくれた後輩たち、同じ目標に向かって切磋琢磨しあった友人たち、そしてどんな時でも暖かく私たちを見守り、惜しみない愛情を注いで下さった家族の支えがあったからこそだと思います。

さて、私たちは今、愛知医科大学を卒業し、医師・看護師としてのスタートラインに立ちます。ついにこれまでの努力が実り、夢が叶うという喜びと、人の生命に携わる責任を持つという緊張感に包まれています。医師・看護師として高い志と使命感を持ち、『患者さんに寄り添った医療者になりたい』という初心を胸に、日々精進して参ります。

最後になりますが、学長先生、御来賓の皆さま方、在学生の方々に厚く御礼申し上げるとともに、お世話になりました先生方、医学部父兄後援会、看護学部父母会、大学職員の皆さま、学生生活においてお世話になった多くの方々、そしてこれまで惜しみない支援をしてくださった家族に、卒業生一同、心から深く感謝申し上げます。

そして母校愛知医科大学の更なる発展を祈るとともに、本学卒業生として、その名に恥じぬように日々研鑽を積み重ねていくことを誓い、卒業生代表の答辞とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。



## 壁掛け時計寄贈

平成30年度医学部卒業生からの卒業記念品として、大本館101講義室に壁掛け時計が寄贈され、平成31年3月26日（火）に除幕式が行われました。【写真】

当日は、佐藤啓二学長、若槻明彦医学部長、島田孝一法人本部長、羽根田雅巳事務局長、平成30年度卒業生は、代表の濱田祐輔さん他3名が出席しました。

濱田さんから「101講義室は試験室として使用されており、試験の際はこの講義室の時計を頼りにしている学生が多くいます。私たちは、この講義室に大きく見やすい時計を設置して、後輩が安心して試験に臨むことができるようにしたいという思いで、この時計を卒業記念品とすることにしました。」と贈呈の言葉があり、佐藤学長から「医師国家試験については、昨年に続いて今年も非常に良い成績を収めて頂き、大学が本当に変わってきたと思います。後輩を思いやる時計を頂いたことで益々加速すると思います。本当にありがとうございました。」



とのお礼のあいさつがありました。

この素晴らしい記念品は、いつまでも大切にさせて頂くとともに、卒業生の皆さんのご活躍を祈念いたします。

## マイセン プラーク「花と鳥」寄贈

平成30年度看護学部卒業生からの卒業記念品として、7号館（医心館）3階フロアに、マイセン プラーク「花と鳥」が寄贈され、3月29日（金）午前10時から除幕式が行われました。【写真】

除幕式には、佐藤啓二学長、坂本真理子看護学部長、高橋佳子教務学生部長などの本学役職者や看護学部の教員を始め、平成30年度卒業生が参加しました。

始めに、卒業生を代表して市野舞さんから、「明るく楽しく自らの目標とする看護師になるため必要な壁を乗り越えながら学生生活を過ごし、この花と鳥が後輩たちを見守ることができることを切に願っています。」とのお礼のあいさつがありました。

引き続き、佐藤学長から「大変素晴らしい記念品を寄贈頂きありがとうございます。末永く大切に保管いたし



ます。」とお礼のあいさつがありました。

この素晴らしい記念品は、いつまでも大切にさせて頂くとともに、卒業生の皆さんのご活躍を祈念いたします。

## 特定行為研修修了証授与式挙行

平成31年3月2日（土）午前9時から理事長室において、平成30年度特定行為研修修了証授与式が挙行されました。【写真】

式では看護学研究科高度実践看護師（診療看護師）コース修了者4名一人ひとりに対し、祖父江元理事長から修了証書が授与されました。

続いて、祖父江理事長から「特定行為研修修了者はこれからの医療を担っていく可能性が大いにあります。皆さまの益々のご活躍を期待しています。」との祝辞が述べられ式は終了しました。

高度実践看護師（診療看護師）コース修了後は、特定行為研修修了者として厚生労働省に報告します。また、一般社団法人日本NP教育大学院協議会が実施する「NP資格認定試験」の受験資格が得られます。



## 祖父江理事長所信表明

平成31年2月25日（月）午後3時から大学本館たちばなホールにおいて、平成31年1月28日（月）に三宅養三前理事長の後任として就任された祖父江元 理事長から、全職員に対して就任に当たっての所信の表明がありました。

祖父江理事長から、まず初めに、現在、少子高齢化、疾病構造の変化、働き方改革、入試問題、保険制度・医療改革、専門医制度改革など非常に大きな構造変化が起こってきていて、私立医科大学は、大変厳しい時期にあるが、一方で飛躍するチャンスでもあり、本学は今、正に次の発展に向けた正念場を迎えているので、全職員に対して意識の変革を期待したいとの言葉がありました。

次に、本学の発展のキーとして「自己実現」、「連携」、「独自性」、「財政基盤の拡充」の四点について具体的な対策を示されるとともに、留意することとして、「50周年事業の成功」、「組織改編と組織評価」、「研究の活性化」、「教育の活性化」及び「国際化の活性化」を挙げ、これ



所信を表明する祖父江理事長

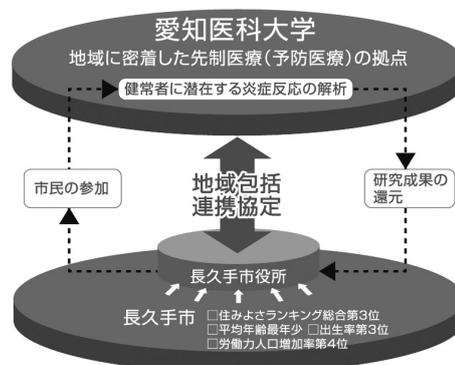
らに全力で取り組んでいくとの決意を表明され、最後に、理事長から、これからの愛知医科大学は「人づくりとイノベーション」で進んでいくとのメッセージが熱く伝えられると、ホールに詰めかけた職員から歓迎の拍手が湧き起こりました。

## 私立大学研究ブランディング事業採択

本学では、平成30年度「私立大学研究ブランディング事業」タイプA【社会展開型】に、本学申請の課題「健康維持・増進を支える次世代先制地域医療：炎症評価コホート研究」が採択されました。同事業は、学長のリーダーシップの下、基軸となる研究を設定して、大学の独自性を大きく打ち出す私立大学に対し、文部科学省が支援する事業です。

本採択事業は、若年者率全国1位、出生率3位を誇る「活力のある若いまち」長久手市との親密な連携を基盤に、炎症に関する学内研究を推進して健康状態の客観的な評価法を確立するとともに、長久手市対象のコホート研究の基盤を整備することを目的としています。これらの研究成果を基に、全年齢層に対応する『健康維持・増進を支える次世代先制地域医療』システムを構築し、健康長寿社会の実現に貢献する大学としての使命を果たしたいと考えています。

佐藤啓二学長の統括の下、渡辺秀人ブランディング事



業実務者会議委員長（分子医科学研究所・教授）を中心に学内外の協力を得ながら本事業を実施することとなります。皆さまのご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## 予算全学説明会開催

平成31年3月27日（水）、平成31年度予算を中心とする全学説明会が大学本館たちばなホールにおいて開催され、職員約190名が参加しました。【写真】

まず、祖父江元 理事長からあいさつがあり、将来を見据えた上での予算の方向性を説明されました。主な項目は以下のとおりです。

- ・予算説明会の開催自体が私立大学ならではの良い習慣であること。
- ・私立大学の格差が大きくなる予想の中、国公立よりも私立の方が伸びしろがあると感じていること。
- ・本学はこのような環境をチャンスに変えて伸びる必要があること。
- ・医学教育分野別評価受審の年であり、OSCE施設整備、シミュレーションセンター拡張等教育改革に投資すること。
- ・研究推進では、私立大学研究ブランディング事業、バイオバンクの推進、企業との連携を行っていくこと。
- ・医療に係る予算では、本院の独自性を打ち出すための脳神経外科領域の体制及び機器等整備の予算を計上したこと。
- ・今後、教育、研究、診療の大学間連携に資する体制づくりが大切であること。



最後に、医師国家試験と看護師国家試験の結果を受け、「医師国家試験の結果は、新卒順位で全国37位であった。私立大学の中では12位となり、昨年度と比べ、順位を上げることができた。看護師国家試験では、合格率100%を4年連続としている。これからもこの記録を続けてほしい。」とのメッセージを送られました。

引き続き、予算責任者である島田孝一法人本部長から、平成31年度予算について、その規模、実質の収支額及び重点事業の内容等について具体的な説明がありました。

## 平成31年度予算大綱

平成31年度予算が、平成31年3月18日（月）の理事会、評議員会において承認されましたので、お知らせします。

教育の分野では、平成29年度新卒者の医師国家試験合格率は95.4%、看護師国家試験合格率は4年連続100%と高い教育効果を発揮しました。医学部一般入学試験の志願者数は、昨年度に比較して406人増加し、過去最高を記録しました。これは、本学が積み重ねてきた医師国家試験合格率の向上と適正かつ公正な入学試験の結果を反映しているものと思われます。

平成31年度は、医学教育分野別認証の受審があり、翌年度には、大学基準協会による大学評価を受審の予定です。これらを抜きなくパスしていくには内部質保証の担保が必要であり、日常から自己点検・評価を行い、PDCAサイクルを回すことが求められています。その一つとして、長期的視点に立ち、開学100年に向けて飛躍的発展を遂げるために「Project100」を掲げ、学部生については研究マインド養成を、大学院生については将来の指導者となりうる人材育成を目途として、大胆な見直し作業を進めていきます。医学部では、日本医学教育評価機構による医学教育分野別認証の受審のほかに、入学者選抜改革、国家試験対策等の重要項目があります。少子化の影響は医科大学も例外ではなく、独自性の発揮が求められるところです。優秀な学生の確保のためにも医学部独自の特色を持ち、これをブランド力に高めていくことが必要となります。そのため医学教育の改革を更に進める必要があります。具体的には教員の教育に対する意識改革を目的としたFDの複数回開催や医学教育カリキュラムの構築、更にはアクティブラーニングの推進に加え、診療参加型臨床実習の積極的導入に取り組みます。昨今の実習重視の傾向にハードの面でも対応し、シミュレーションセンターの拡張等抜きなく進めていきます。

看護学部創設からまもなく20年となります。この間、県内の看護系大学は急増の一途を辿り3倍となりました。今後も選ばれる看護学部となるため、教員のFD活動を活発に行い、看護学モデル・コア・カリキュラムを参考に、教育内容の点検を行って、より充実したカリキュラムの策定に努めています。また、日本看護学教育評価機構により、看護教育における分野別評価の試行も始まることから、第三者機関による評価にも耐えうる教育内容を提供できるよう邁進していきます。

研究の分野では、研究における自己実現には、外部資金の獲得が推進力となります。科学研究費申請件数はこのところ増加傾向にありましたが、平成30年度は209件となり前年度から微減の結果となりました。これは採択件数が増加した影響と一定数の教員が入れ替わった結果と思われます。平成31年度は再度増加に転ずるべく

Jump Up作戦を継続しつつ、助教層における研究マインド醸成に向けた施策を講じていきます。また、研究活動をバックアップする研究創出支援センターにおけるバイオバンク活動も軌道に乗ってきました。正確な臨床情報と詳細な遺伝子情報を利用する近未来の臨床研究が数多く生まれることが期待されます。更に、がんゲノム医療は本学が取り組まなければならない焦眉の事業であり、地域がん診療連携拠点病院に止まらず、がんゲノム医療連携拠点病院の指定も視野に入れ研究活動の活性化に取り組みます。

医療分野では、病院全体の診療体制を強化していく上で、診療科への人員配置の偏在が顕在化してきました。診療科ごとの配置数と医療収入、教育の負担等を合理的に評価して、「全体最適」となるよう努めなければなりません。まずは、人材という最も大事な資源を流動的に配置していけるよう臨床教員定数の中央化を進めることとしています。病院の活力の源となっている医員助教・専修医卒については、平成30年度に引き続き増員します。また、看護職員を始めとした医療職員についても医療安全に十分配慮し、適正配置を進めていきます。

振り返れば平成26年5月の新病院開院から5年が経とうとしています。特定機能病院としての役割を果たせるよう常に最先端の医療機器を配備した最新医療を展開するため、医療機器を年次計画で更新、整備していきます。医療界、特に医科大学を取り巻く環境は年毎に厳しさが増し、医師の働き方改革、地域医療の再編等課題が山積しています。こうした時こそ正念場と心得、困難な課題であっても積極果敢に対応し、病院として確固たる実績を重ねていきます。医育機関の一つとして、臨床研修医制度と新専門医制度の運用についても、厚生労働省、日本専門医機構の動向を注視しながら、機敏に対応していきます。

また、新体制2年目となるメディカルクリニックも活性化を目指し広報事業を更に強化していきます。

### <主な事業>

#### 教育・研究に関するもの

##### ○教育環境の整備

- ・OSCE実施必須課題数が今後増えていくことに対応するため、部屋を改修。
- ・C棟8階に学内で2か所目となるシミュレーションセンターを整備し、シミュレーション教育やアクティブラーニングの増加に対応。

##### ○医学教育改革

- ・教育改革につながる事業について、年度中臨機に対応できるよう、学長裁量費を予算化。

##### ○研究活動の活性化

- ・私立大学研究ブランディング事業「健康維持・増進を支える次世代先制地域医療：炎症評価コホート研究」を実施。

## 医療に関するもの

### ○教職員の増員

- ・診療体制を充実させ、増患、増収を図るため、院長枠として助教を予算化。
- ・脊椎・脊髄センターに教授（特任）ポストを設置。
- ・臨床腫瘍センター（腫瘍外科部門）、緩和ケアセンターに准教授ポストを設置。
- ・医員助教・専修医枠の増員
- ・スタッフの増員（薬剤師、言語聴覚士、管理栄養士（嘱託））

### ○診療用機器の整備

- ・ガンマカメラ（SPECT装置）2式、アンギオ（血管撮影）装置を整備。
- ・全自動輸血検査装置を更新。

- ・人工心肺装置、経皮的心肺補助システム、画像診断センター3D画像配信システム、一般撮影検像システムを更新。

### ○診療活性化対策（病院長インセンティブ）

- ・病院長インセンティブを支給し、診療の一層の活性化を図る。

## 法人・大学運営に関するもの

### ○省エネ事業

- ・4号館（看護学部棟）の経年劣化したビルマルチエアコンと照明器具を更新。
- ・病棟（中央棟、C棟）の蛇口・シャワーヘッドに節水水栓器具を取り付け。

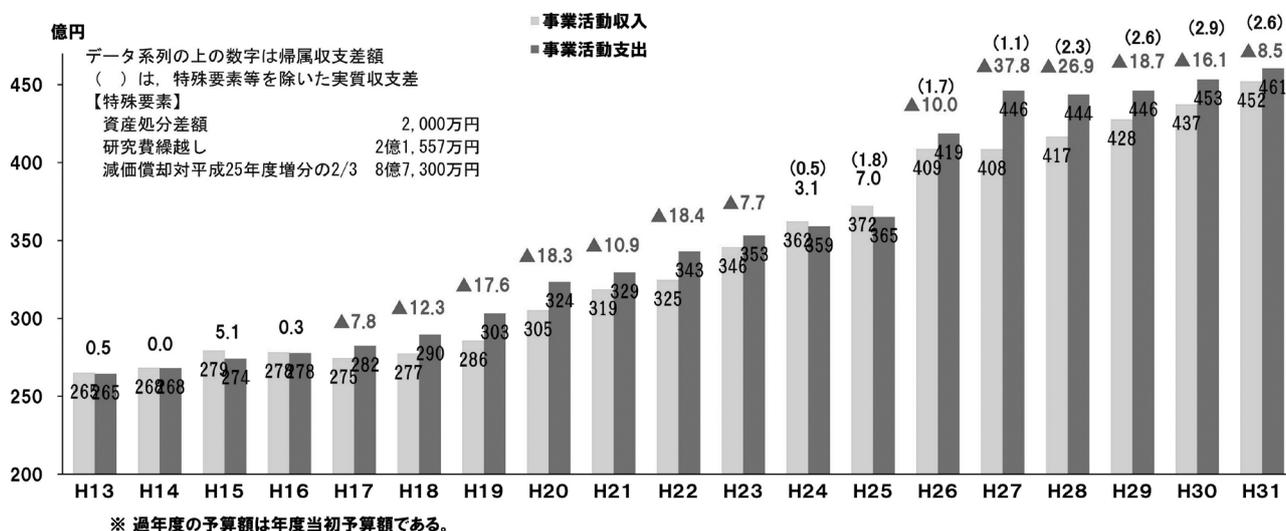
### ○建物修繕

- ・C棟屋上井水高置水槽修繕工事
- ・1号館自動火災報知設備更新工事
- ・中央棟電話交換機携帯局線収容基盤（PRI）増設工事

平成31年度の予算状況は、

**事業活動収入 452億0,051万余円**  
**事業活動支出 460億5,086万余円**

となっており、事業活動収支差額は8億5,036万余円の支出超過となり赤字となっていますが、特殊要素等を除いた実質の収支額は2億5,821万円の黒字予算となっています。



事業活動収支予算では、収入45,201百万円（前年度比3.21%増）、支出46,051百万円（前年度比1.36%増）となり、収支差は、850百万円の支出超過となっていますが、資産処分差額20百万円、研究費の繰越分216百万円、減価償却額の対平成25年度増額分の2/3となる873百万円の単年度特殊要素等を調整後の収支差では、258百万円の黒字予算となっています。

資金収支予算では、学生生徒等納付金収入5,086百万円、寄付金収入444百万円、補助金収入1,733百万円、医療収入36,500百万円など資金収入合計46,844百万円となっています。

一方、人件費支出18,998百万円、教育研究費支出21,782百万円、管理経費支出719百万円、施設関係支出182百万円、設備関係支出1,606百万円、借入金等返済支出1,842百万円など資金支出合計45,997百万円となっています。

# 資 金 収 支 予 算

平成31年4月1日から  
平成32年3月31日まで

(単位：千円)

収入の部			
科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減
学生生徒等納付金収入	5,086,280	5,066,500	19,780
手数料収入	253,772	261,243	△ 7,471
寄付金収入	444,000	480,196	△ 36,196
補助金収入	1,733,312	1,723,278	10,034
資産売却収入	0	0	0
付随事業・収益事業収入	481,912	492,231	△ 10,319
医療収入	36,500,000	35,148,282	1,351,718
受取利息・配当金収入	4,359	5,361	△ 1,002
雑収入	666,870	586,098	80,772
借入金等収入	150,000	150,000	0
前受金収入	946,167	895,556	50,611
その他の収入	7,903,265	7,842,726	60,539
資金収入調整勘定	△ 7,326,215	△ 7,257,845	△ 68,370
前年度繰越支払資金	4,255,239	3,716,573	
収入の部合計	51,098,961	49,110,199	1,988,762

支出の部			
科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減
人件費支出	18,998,290	18,862,582	135,708
教育研究経費支出	21,782,077	20,849,223	932,854
管理経費支出	718,837	655,366	63,471
借入金等利息支出	285,068	302,958	△ 17,890
借入金等返済支出	1,841,846	1,741,846	100,000
施設関係支出	181,877	92,461	89,416
設備関係支出	1,606,308	869,992	736,316
資産運用支出	150,000	150,000	0
その他の支出	4,558,931	4,533,285	25,646
〔 予 備 費 〕	200,000	300,000	△ 100,000
資金支出調整勘定	△ 4,326,348	△ 3,724,358	△ 601,990
翌年度繰越支払資金	5,102,075	4,476,844	625,231
支出の部合計	51,098,961	49,110,199	1,988,762

# 事業活動収支予算

平成31年4月1日から

平成32年3月31日まで

(単位：千円)

		科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減	
		教育活動収入の部	事業活動収入	学生生徒等納付金	5,086,280	5,066,500
手数料	253,772			261,243	△ 7,471	
寄付金	415,000			451,500	△ 36,500	
経常費等補助金	1,690,237			1,645,806	44,431	
付随事業収入	481,912			492,231	△ 10,319	
医療収入	36,500,000			35,148,282	1,351,718	
雑収入	666,870			586,098	80,772	
教育活動収入計	45,094,071			43,651,660	1,442,411	
教育活動支出の部	事業活動支出	科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減	
		人件費	19,111,482	18,974,272	137,210	
		教育研究経費	25,488,077	24,962,223	525,854	
		管理経費	934,037	864,546	69,491	
		徴収不能額等	12,200	7,380	4,820	
		教育活動支出計	45,545,796	44,808,421	737,375	
		教育活動収支差額	△ 451,725	△ 1,156,761	705,036	
教育活動外収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減	
		受取利息・配当金	4,359	5,361	△ 1,002	
		その他の教育活動外収入	0	0	0	
			教育活動外収入計	4,359	5,361	△ 1,002
	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減	
		借入金等利息	285,068	302,958	△ 17,890	
その他の教育活動外支出		0	0	0		
		教育活動外支出計	285,068	302,958	△ 17,890	
		教育活動外収支差額	△ 280,709	△ 297,597	16,888	
		経常収支差額	△ 732,434	△ 1,454,358	721,924	
特別収支	事業活動収入の部	科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減	
		資産売却差額	0	0	0	
		その他の特別収入	102,075	136,168	△ 34,093	
			特別収入計	102,075	136,168	△ 34,093
	事業活動支出の部	科 目	本年度予算	前年度(9月補正後)予算	増 減	
		資産処分差額	20,000	20,000	0	
その他の特別支出		0	0	0		
		特別支出計	20,000	20,000	0	
		特別収支差額	82,075	116,168	△ 34,093	
		〔予備費〕	200,000	300,000	△ 100,000	
		基本金組入前当年度収支差額	△ 850,359	△ 1,638,190	787,831	
		基本金組入額合計	△ 3,000,000	△ 3,000,000	0	
		当年度収支差額	△ 3,850,359	△ 4,638,190	787,831	
		前年度繰越収支差額	△ 55,917,738	△ 51,173,706	△ 4,744,032	
		翌年度繰越収支差額	△ 59,768,097	△ 55,811,896	△ 3,956,201	
(参考)						
		事業活動収入計	45,200,505	43,793,189	1,407,316	
		事業活動支出計	46,050,864	45,431,379	619,485	



### — Plus Ultra 再興！ —

病院長 藤原 祥裕

2019年4月1日から新しく病院長に就任いたしました藤原祥裕です。

新病院が開院してすでに5年が経ちました。この間、愛知医科大学病院の業績は一貫して右肩上がりです。5年前と比較しますと、本院の年間手術件数は9,000件から12,000件に、救急車搬送台数は4,000件から7,000件に、年間の医療収入は260億円から340億円にといずれも大幅に増加しました。総じて順調な5年間であったと思いますし、内外から本院の成長にお褒めのお言葉を頂戴することも珍しくありません。

しかし、ひとたび外に目を向けてみると、浮かれてばかりもいられないことが分かります。平成29年度の全国私立大学医学部附属病院本院の医療収入と本院のそれを比較しますと、29大学中本院は17位と真ん中よりやや下といったところです。愛知医科大学には分院がありませんので、大学全体での医療収入を比較すると更に順位は下がってしまいます。企業などの経営で最も重要なのは収入ではなく利益（＝収入－支出）ですが、大学病院の業績を評価する上で医療収入はとても重要な指標だと私は思っています。なぜかという、大学病院の使命は医療を通じて社会に貢献することであり、医療収入は大学病院の提供する医療サービスの質×量に相関しているからです。

一方、長年過重労働を当然のように行ってきた医療従事者にも働き方改革のメスが入れられようとしています。職員の皆さんが過重労働することなく、プライベートな生活も十分楽しんで頂きたいと思っておりますが、その代わりに業務の効率化を図り、より短い就労時間でより高い成果を出すことが求められます。業務内容を整理するとともに多職種からなるチーム医療を推進し、可能なものについては業務上の権限移譲を進めていく必要があるでしょう。

昨今、地域医療構想という言葉をあちこちで目にする機会が増えてきました。諸外国に比べて多すぎる病床数を整理し、地域ごとに医療施設間で機能分担を再検討し、より効率的で効果的な地域医療を実現しようというもの

です。愛知医科大学病院のある尾張東部医療圏も例外ではなく、近い将来我々を取り巻く医療環境が大きく変わる可能性が高いと思われます。そんな中で、本院が生き残るためにはレベルの高い医療サービスを提供し続けなければなりません。そのためには、優秀な人材の採用、建物の新築、医療機器の整備、薬品・医療材料の購入などますます資金が必要な時代となってきています。こうした変化に対応するためには、大学の体力を十分につけておく必要があると考えます。そのためには過去5年間の成長トレンドを更に加速させ、頑健性のある経営状態を構築していく必要があります。

現在の病院を建てる時、新病院建設委員会で病院のモットーを「Plus Ultra 創造する未来へ－限界を超えて、さらにその先へ－」と決めました。Plus Ultraとはスペインのモットーにもなっており、ラテン語でもっと先へという意味です。新病院が開院してからこの言葉は院内であまり注目されることはなかったように思いますが、私は今こそこのモットーを再興する時ではないかと考えます。現状に甘んじることなく、自ら限界を設定することなく、より高いレベルを目指して邁進する、そんな姿勢が今の愛知医科大学病院に最も求められるのではないかと考えます。

皆さまにおかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようどうぞ宜しくお願いいたします。

## 主な役職者の改選

### ○ 大学

#### 【副学長（特命担当）】



#### 羽生田正行

(外科学講座(呼吸器外科)・教授)

このたび自己点検・評価及び医療連携推進を担当する副学長を拝命しました。2020年度の大学基準協会による大学評価の受審に向けた準備を進めて参ります。また、地域医療構想がなかなか進まない中で、国は更なる大胆な変革を求めています。愛知医科大学は尾張東部二次医療圏北部のリーダーとして、これまで以上に病床再編へ積極的に関与し、この地区のより良い医療体制構築に努めていかなければならないと考えています。

(新任，任期：H31. 4. 1～R 2. 3. 31)

#### 【研究創出支援センター長】



#### 武内 恒成

(生物学・教授)

研究創出支援センター長を拝命いたしました。昨年度は多くの先生方のご協力からバイオバンクの充実に弾みがつきました。本年度は研究支援部門のうち、将来的なURA体制整備も見据えております。研究支援、バイオバンク、共同実験の各部門からなる同センターが、本学の研究活動の質的向上に貢献できますよう、努めて参りたいと思じます。

(再任，任期：H31. 4. 1～R 3. 3. 31)

#### 【国際交流センター長】



#### 渡辺 秀人

(分子医科学研究所・教授)

本学の国際交流活動を統括する国際交流センターは、学生・教職員の国際交流、学生・教職員向けの語学力向上、異文化理解等を目的としたセミナーの開催、外国人研究者の支援等の事業を行っています。どうぞ宜しくお願いします。

(再任，任期：H31. 4. 1～R 3. 3. 31)

### ○ 医学部

#### 【教務部長】



#### 石橋 宏之

(外科学講座(血管外科)・教授)

学是「具眼考究」に基づいて、卒業時に47コンピテンシーを習得させ、「(非侵襲的医療行為を任せることが)できる student doctor」育成を目指します。国試合格率は2年連続して全国平均を上回りました。今後、留年生を減らしつつ、この水準を維持します。

(再任，任期：H31. 4. 1～R 3. 3. 31)

#### 【産業保健科学センター長】



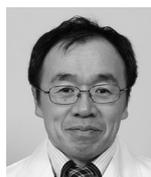
#### 鈴木 孝太

(衛生学講座・教授)

引き続き、産業保健科学センター長を拝命いたしました。働き方改革など、時代とともに移り変わる多様な労働状況や産業構造を客観的に把握し、科学的なエビデンスを基に、働く人々の健康増進、疾病予防を推進し、社会に貢献して参りたいと思います。

(再任，任期：H31. 4. 1～R 3. 3. 31)

#### 【運動療育センター長】



#### 牛田 享宏

(学際的痛みセンター・教授)

病院や自治体、その他の機関との連携し、スポーツをする市民から患者さんまで広くニーズに合った新しいコンセプトでセンターの活性化を目指したいと思います。

(再任，任期：H31. 4. 1～R 3. 3. 31)

#### 【薬毒物分析センター長】



#### 妹尾 洋

(法医学講座・教授)

中毒事例に対応できるよう、高度救命救急センターとの連携を密に取りながら取り組んでいきたいと思じます。

(再任，任期：H31. 4. 1～R 3. 3. 31)

## 【医学教育センター長】



伴 信太郎

(医学教育センター・特命教授)

医学教育センター長は2期目となります。ようやく各科の先生方のお顔やそれぞれの科のニーズが大まかながら掴めるようになってきました。愛知医大の教育が、一つのブランドとして売り出せるように努力して参ります。皆さまのご協力を宜しくお願いいたします。

(再任, 任期: H31. 4. 1 ~ R 2. 3. 31)

## 【シミュレーションセンター長】



伴 信太郎

(医学教育センター・特命教授)

引き続き2期目のシミュレーションセンター長を拝命いたしました。2019年度はセンターの大幅な拡張が認められました。専任教員の川原千香子講師を中心に、患者安全に貢献できるoff-the-job実習／研修の場として整備していく予定ですのでご活用ください。

(再任, 任期: H31. 4. 1 ~ R 2. 3. 31)

## 名誉教授称号授与式挙行

平成31年3月31日付けをもって定年退職等された高安正和教授(脳神経外科学講座)、塩見利明教授(睡眠科)、池田洋教授(病理学講座)、横尾和久教授(形成外科)、衣斐達教授(病態治療学)、西川和裕教授(病態保健学)に愛知医科大学名誉教授の称号が授与され、平成31年4月8日(月)正午から大学本館役員会議室において授与式が行われました。

授与式には、祖父江元 理事長を始め、佐藤啓二学長、若槻明彦副学長(医学教育担当)、坂本真理子副学長(看護学教育担当)、島田孝一法人本部長、羽根田雅巳事務局長が出席し、祖父江理事長から称号記が授与されました。



出席者による記念撮影

記念撮影の後、昼食を交えた懇親会が開かれ、和やかな雰囲気の中、午後1時ごろ授与式は終了しました。

## 名古屋市教育委員会共催 市民大学公開講演会開催

平成31年2月23日(土)午後1時30分から鯉城ホールにおいて、名古屋市教育委員会との共催で市民大学公開講演会が開催されました。

当日は、名古屋市を始めとする多くの一般市民の方々にご参加頂き、「愛知医科大学における最先端研究・医療」をテーマに、二部構成で行われました。

講演会は、佐藤啓二学長による開催のあいさつに始まり、第一部の講演では、内科学講座(糖尿病内科)の加藤義郎准教授が「糖尿病最前線～最新治療と生活習慣の工夫について～」と題して、糖尿病の最新治療とともに、食事療法や運動療法などについてわかりやすくお話し頂きました。

続いて、第二部の講演では、外科学講座(消化器外科)の小松俊一郎教授(特任)が「“患者さんにやさしい”おなかの手術～腹腔鏡手術の最前線～」と題し、最新の手術



加藤准教授



小松教授(特任)

術方法について、手術動画を多数交えながらお話し頂きました。

参加者からは「最新の医療を知ることができ、大変勉強になった。」など好評な意見を頂戴し、盛況のうちに講演会は終了しました。

## 大学運営審議会～新メンバーでスタート～

学長及び副学長を中心に大学の重要事項及び将来構想等を審議する組織として、平成28年4月1日付けにて設置された「大学運営審議会」については、発足から3年が経過しました。

会議は、毎年度20回程度開催され、各種規則の改廃に係る審議の他、副学長から学部・病院の動向や課題等について随時報告がなされ、両学部間での情報共有が図られています。

昨年度に任期満了に伴う病院長の改選があり、また、副学長規程が見直されたことから、副学長（特命担当）が1名追加指名され、平成31年4月8日（月）に第1回の大学運営審議会が開催されました。【写真】

今年度は、医学教育分野別評価（国際認証）の受審や、来年度の大学基準協会の認証評価受審に向けて、全学的な内部質保証への取り組みが課題となっています。構成員各人が多忙の中ではありますが、様々な課題への迅速な対応を重視し、開催時間を調整しながら積極的に開催していきます。



### <構成員>

学長	佐藤 啓二
副学長（医学教育担当）	若槻 明彦
副学長（看護学教育担当）	坂本真理子
副学長（診療担当）	藤原 祥裕
副学長（特命担当）	春日井邦夫
副学長（特命担当）	羽生田正行
事務局長	羽根田雅巳

## 平成31年度職員新任式挙行

平成31年4月1日（月）C病棟201講義室において、平成31年度職員新任式が挙行されました。

式では祖父江元 理事長から「社会の変化に適応し進化していくためには、“イノベーション”が非常に大切で、組織全体を転換しようということだけではなく、個人レベルでも、日々新しく変わろうという意識や職場の中で行う創意工夫が大変重要と考えています。皆さんには、ぜひ早く職場に慣れて頂き、愛知医科大学のために頑張ってもらえることを期待しています。」とあいさつがありました。

なお、今年度の新規職員は242名で、内教員78名、事務7名、医療14名、看護143名です。



宣誓を述べる新規職員

## 自動運転バスの実証実験実施

平成31年4月8日（月）から12日（金）の間、本学への乗り入れバスである名鉄バスにより、名鉄瀬戸線尾張旭駅から本院までの4.5kmにおいて、名古屋鉄道株式会社、名鉄バス株式会社及び国立大学法人群馬大学による自動運転バスの実証実験が実施されました。

この実験は、自動運転バスの運行や安全性向上に向けた検証と自動運転に対する社会受容性の醸成を目的に実施されたもので、公道におけるバスの自動運転の実証実験としては、愛知県内では初の取り組みです。

また、4月8日（月）午後3時から尾張旭駅において、愛知県の大村秀章知事を始め関係者による出発式が行われ、到着地点となる本院バスロータリーにおいて、記念撮影が行われました。【写真】



## 平成31年度新規採用職員研修実施

平成31年度新規採用職員164名を対象に、平成31年4月2日（火）・3日（水）の2日間にわたり、事務職員・医療職員・看護職員合同の新規採用職員研修が実施されました。

初日は、社会人としての心構えや立ち振る舞い、正しいビジネスマナーの知識を習得する研修を行い、受講者からは「常に誰かに評価されているということを意識して行動していきたい。」「今回学んだことを踏まえて、コミュニケーションをとって信頼関係の構築に活かしたい。」といった感想がありました。

2日目は、本学の概要、ビジョン等を説明する講義が行われ、島田孝一法人本部長から、本学の財政やキャンパス再整備に関する説明に加え、努力すること、仕事を楽しむことの大切さを伝えられました。続いて、藤原祥裕病院長から、本院の理念と基本方針、平成31年度の病院の目標について説明があり、「本院の将来を創るのは皆さんです。」とメッセージが贈られました。受講者からは「病院の理念、基本方針、スローガンを学んだことにより、これから働く上で意識しなければいけないことが明瞭になった。」「愛知医科大学の基本理念について改めて詳しく学ぶことができ、職員として病院の更なる発展に貢献していきたいという思いがより一層強くなった。」との感想がありました。



説明する藤原病院長



研修風景



決意表明を手に記念撮影

続いて、平成31年4月4日（木）には、事務職員7名、医療職員11名を対象に、「社会人」ではなく「プロフェッショナルな組織人」への意識改革を目的とした研修「デイスカバリー」を実施しました。物の見方を変えるパラダイム転換や責任感を高めるオーナーシップを学び、受講者からは「常に冷静に自己分析し、自分をコントロールしていきたい。」「与えられた仕事の目的・意義を見つけ出し、最後まで責任をもってやり抜く努力をしたい。」といった感想がありました。

他職種合同の研修期間を終えた後、平成31年4月5日（金）・8日（月）の2日間にわたり、新規採用事務職員研修が実施され、電話対応や文書事務、経理システムなど業務遂行に必要なスキルを学びました。受講者からは「電話対応は重要な業務の一つなので丁寧に対応できるようになりたい。」「ビジネス文書の目的や言葉の意味を理解して、より良いものを作れるようにしていきたい。」と振り返りのコメントがありました。

研修最終日には、管理職等約30名の前でプレゼンテーションを行い、内定期間中からグループで取り組んだ「愛知医科大学・病院の特徴」と「愛知医科大学の職員として、どんな大学及び病院にしていきたいか」を発表し、最後には各自決意表明が述べられました。

### <講義概要>

4月2日（火） 職場の常識、ビジネスマナー

4月3日（水） 大学の概要とビジョン、新規採用職員に期待すること

### <講義概要>

「プロ意識」、「目的・意義」、「ソリューション」、「ポテンシャル」を見出す

### <講義概要>

文書事務、電話対応、事務端末の取扱  
グループ課題発表

## 新規採用事務職員フォロー研修実施

事務部門では、平成30年度に採用された職員に対し、配属後1年を区切りとしたフォロー研修が平成31年3月15日（金）に実施されました。【写真】

事前課題で調査した「2年目に期待される役割」と各自が考えた「期待に応えるためにすべき行動」を共有し、「主体的に動く」、「業務の優先順位を考える」、「後輩の理解者、模範になる」など2年目に向け具体的な目標を立てる機会となりました。また、キャリア学習として、3年後、5年後どんな職員になりたいのか、そのために必要な取り組みについても検討しました。

受講者からは、「自分のありたい姿を考えることによってモチベーションを維持し、新たなことに積極的に挑戦していきたい。」、「求められていることを踏まえた上で目標を立てることが、働くにあたって必要だと分かっ



た。」といった感想がありました。本学の将来を担う貴重な人財として、更なる成長と今後の活躍が期待されます。

## 災害医療研究センター 防災講演会開催 ともに～震災に負けない地域ネットワーク～

災害医療研究センターでは、厚生労働省の平成30年度老人保健健康等事業の採択を受け、「災害時を想定した視点からの地域ネットワークモデル事業」として、南海トラフ地震及び津波による被害が想定される東海地方において、防災・減災を意識した地域包括ケアシステムや地域コミュニティの強靱化について検討し、その案をまとめて公表することで、全国の自治体に対して「地域コミュニティの強靱化を包含した地域包括的ケアの確立」に向けた方法論として発信するための事業を実施しています。

この事業の一環として、平成31年3月9日（土）午後3時30分から大学本館たちばなホールにおいて、「ともに～震災に負けない地域ネットワーク～」をテーマに、平成30年度厚生労働省健康増進事業においてとりまとめた「災害時における地域ネットワークのあり方」を提言することを目的とした防災講演会を開催しました。

講演会は、佐藤啓二学長の開会あいさつ、東海北陸厚生局健康福祉部の小平鉄雄部長の来賓あいさつに始まり、基調講演として、岩手医科大学災害時地域医療支援教育センターの眞瀬智彦教授による「東日本大震災での医療ネットワーク構築」の講演に続き、災害医療研究センターの加納秀記センター長を座長として、東日本大震災や熊本地震の経験者による講演、芝浦工業大学システム理工学部の市川学准教授から「災害時情報共有のいまとこれから」と題した講演がありました。

この後、長久手市の自治会代表者も加えて、パネルディスカッションが行われ、最後に、長久手市の吉田一平市長から閉会あいさつがあり、講演会は終了しました。

講演会終了後には、「災害時における地域包括情報見える化システム」として、インフラ脆弱化の被災時に必要な情報を各拠点がリアルタイムで情報共有できるシステムの紹介と体験を行いました。

講演会のアンケートにおいて、参加者から、地域コミ



佐藤学長



小平部長



眞瀬教授



吉田市長



パネルディスカッション

ュニティ強靱化のために平時からのコミュニティ確立の必要性があるとの回答を多く頂いており、災害への意識とともに地域コミュニティ確立の重要性の高さが窺われました。

# 教授就任インタビュー



脳神経外科学講座・教授

みやち しげる  
宮地 茂

## — 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

2017年に脳血管内治療センター教授としてお招き頂いてから、脳神経外科の中での脳血管内治療の普及と発展に努めて参りましたが、今回高安正和教授の後任として脳神経外科学講座の教授を拝命するに当たり、これからは俯瞰的なビジョンをもって教室運営を進めて参りたいと思っています。

脳血管内治療については、この2年間で症例数は4倍に伸び、困難症例の紹介も増えて参りましたが、今後は他の分野につきましても、それぞれ到達目標を定めて愛知、東海の拠点として機能するように作り上げていきたいと思っています。本院の伝統であり看板でもある脊椎脊椎外科は、今回センター長として招聘した原政人先生を中心に、整形外科とタイアップして、まさにこの地区のセンターとなることを目指します。

一方、腫瘍外科については新しい内視鏡を導入し、治療の幅を広げた取り組みを行っていくため、人事的な充実を行って参ります。病院の発展のためには質と量の充実が最大の課題ですが、そのためには「ヒト」と「モノ」が不可欠であります。まずは新しい専攻医の養成が急務ですが、今年3年ぶりに新しい後期研修医が入ってくれました。金の卵として大事に育てていきたいと思っております。また、今回優れた専門医の獲得とともに、高度治療実践のために必要な機器も、今年度予算で全て購入してもらえました。身に余るご厚情であり、心より感謝申し上げますが、同時に多大なる期待を背負っての船出となることを肝に命じて、今後の診療活動に当たって参ります。また、研究においても臨床研究を中心に、新しい展開をしていこうと思っております。何卒宜しくお願い申し上げます。

## — 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

脳血管内治療を志したきっかけについてはすでにお話しましたので\*、脳神経外科を選んだ動機について書かせて頂きます。もともと学生時代の私は、ヒトの生死に関わるような重大な仕事をやりたくなかったので、整形外科医又は精神科医として物を書いたりしようと気楽に思っていました。

しかし、名古屋掖済会病院での1年目の研修で最初に脳神経外科をまわったこと、先輩の勧誘と他科の医師から「脳外科の方が向いている。」というような戦略的(?)アドバイスがあり、全く自分の考えと正反対である脳外科に足を踏み入れることになりました。しかし、今の私には自分の天職として合っていたと思うことができるので、自身の強い意思で決めたのではなく、皆さんの助言に従ったこの選択は正解であったと思っています。

\*学報 第149号P10 (2018年1月)

## — 学生へのメッセージをお願いします。—

そっけないことを言うようですが、学生時代に思っていた夢は、上記の私のように現場に入ると簡単に壊れたり、他に目移りしたりします。まずは、国家試験に通って医師になることは絶対ですが、その後は「自分の好きな科を選ぶ。」というよりは、「自分が必要とされるのはどこか。」、特に「社会に貢献できるにはどうしたらよいか。」ということを考えて進路を決めてください。「楽なところが良い。」という考え方は、最初は良いかもしれませんが、そのうち物足りなくなるとともに、そのポリシーは患者さんにも伝わって忌避されるようになるでしょう。過労になるほどストイックに自分を追い込む必要はないですが、いろいろな意見に耳を傾けて、貪欲に向上心を持って前向きに取り組んでください。

人生どこで転機があるかわかりませんよ。



ミラノのビアホールにて



形成外科・教授

ふるかわ ひろし  
古川 洋志

### — 教授就任に当たっての 抱負を聞かせてください。—

形成外科は、機能と整容性を再建するのが仕事です。時として整容性は、機能より重大な意味を持つこともあります。もし今日、大事な面接があったり、勝負のデートだったり、大勢の前で人生を賭けたプレゼンテーションをしなくてはならないときに、鼻のてっぺんの「おでき」がその日たまたま腫れて赤くなっていたら、憂鬱になりますよね。また、生まれつきのお顔など露出部のアザは、機能に支障がなくても、本人はもちろん親御さんの子を思う苦悩は察するに余りあります。

私は「血管腫・血管奇形」を専門としています。「血管腫・血管奇形」は、むかしは「赤あざ」、若しくは「血管腫」としてひとくくりされていた疾患ですが、近年は、同じ「赤あざ」であっても真の血管腫と、血管の拡張病変（血管奇形もしくは血管形成異常）とをきちんと区別することが診療上最も大事なポイントとなってきました。この診断は、医療者側にとっても患者さん側にとっても大事な予後、すなわち、消える赤あざなのか、消えない赤あざなのかを予測する上で重要です。また、治療法も従来のレーザー照射、切除手術などに加え、硬化療法、薬物治療が登場し、生まれつきのアザの治療は急速に進歩しています。最新の診断技術と集学的治療を、複数の診療科の協力を得ながら愛知医科大学病院を訪れる患者さんに提供できるよう日々努力して参ります。

また、私のもう一つの専門分野の「皮膚悪性腫瘍」、「リンパ浮腫」について、主にリンパ節の移植によるリンパ浮腫の治療や腫瘍免疫の亢進をテーマにこれまで研究を行って参りました。がんの治療の一環として切除されていたリンパ節をなるべく温存、もしくは切除後移植することにより、浮腫を軽減し免疫を高めて抗腫瘍効果を持たせようという試みです。今後も愛知医科大学の更なる発展に貢献できるよう、診療、教育、研究に努力していきます。

### — 現在の研究分野に進まれた きっかけを教えてください。—

学生時代に形成外科というのはあまりなじみが無く、外傷や熱傷で皮膚を切ったり貼ったりする医者

というイメージでしかありませんでした。私が卒業した北海道大学には、形成外科の講義があり、顔面の骨を移動させたり、頭蓋の容積や眼窩間距離を拡大させたり、腹部の組織を使って頭頸部や乳房の癌切除で失われた部分を再建したりと、様々な技術で自由に自家組織を移動できるすごい技術を持った診療科だと驚いたのを覚えています。また、こうした形成外科学の講義がされている大学は、当時全国の医育機関で半分程度と聞かされました。

私は迷うこと無く北海道大学の形成外科に入局しました。怪我や手術の傷をきれいに治す仕事ばかりではなく、なかなか治らない傷にであったり、広範囲の熱傷の感染で救命の手術をしなくてはならなかったりと様々な経験を積むことができました。手術が上手であることはもちろん大事ですが、方針を決める際の主治医の勉強と経験、患者さんとのコミュニケーション、更にはコメディカルとの連携が大変重要で、現在ではしっかりと患者さんの要望を汲み、その疾患の性質から予想される術後の経過や予後患者さんと共有しながら、チームを組んで治療方針を組み立てていくよう努めています。

### — 学生へのメッセージをお願いします。—

手術を含めた診療、研究の手技や手法、考え方は医師になってから少しずつ身に付けていけば良いのですが、患者さんの中には、譲れない主張をお持ちの方もおられ、そこに気付かずに教科書どおりの治療を進めていくと、主治医の達成感と患者さんの満足度は解離してしまいます。よって患者さんのお気持ちや考えを十分に把握する努力が大事です。

更に、自分よりも年配の患者さんと向き合うためには、医師としての経験だけでなく、人生経験をいっぱい積んでいこうが良いでしょう。人と人が接して話し合うという医療現場では、相手の置かれている状況を察して、気遣う姿勢が私たちの想像以上に大事であり、そのためには、普通の社会生活を普通に行える基礎を学生のうちから身に付けておいた方が良くと思います。きちんと授業に出席し、求められる課題をこなすのはもちろん、クラブ活動や友人との交流でも、あいさつや節度ある態度、日常生活でもきちんと料理を作るだとか、自分を育ててくれている家族への感謝や思いやりなど、身の回りでできることはたくさんあります。

積極的な部活動や、旅行やボランティア活動といった経験も、学生としてできる貴重な経験でしょう。これらは卒業後、直接医師としてのキャリアに直接寄与しないように見えますが、いぶし銀のように医師となった後に皆さんの「かくし味」となり、患者さんや上級医からはそれが感じられるものです。

学生時代にしかできない経験を多く積んで、まずしっかり社会人としての力を築いてください。それが、学生時代から医師になってからの、継ぎ目のない活力となって皆さんの人生の力になるでしょう。



某ビール工場にて



医療安全管理室・教授

すぎもと いくお  
杉本 郁夫

— 教授就任に当たっての  
抱負を聞かせてください。—

2019年4月1日付けで医療安全管理室教授の任を受けました。私は1984年に医師となり、外科医として34年間働いて参りました。この間に、医療安全管理室副室長やセーフティマネージャーの経験はありましたが、本格的に医療安全管理室業務に携わったのは2018年1月からで、わずか15ヵ月間のみです。医療安全管理専属の経験期間は十分ではありませんが、この分野では実臨床の経験なくしては勤まらないと思います。実臨床で培った医療知識、コミュニケーション能力等に加えて、医療安全という立場からの視点、考えを持って対応していく必要があると考えております。

様々の事情によりこの重責を担うことになりましたが、医療安全の果たす役割は大きく、患者さんご家族はもとより、職員、更に母校や医療界のためにも頑張っていきたいと思っております。

オフショット



揖斐川マラソンでのランニングドクター

— 現在の研究分野に進まれた  
きっかけを教えてください。—

私が医師として働き始めた頃（1980年から1990年代）は、今のような医療安全に対する認識は乏しかったと思います。1999年に米国の医療の質に関する委員会から報告された「TO ERR IS HUMAN：人は誰でも間違える」において、米国の医療事故死者数は年間44,000人と驚くべき数値が示され、医療の危険性や不安定性が認識されるようになりました。

時を同じくして、1999年に横浜市立大学事件（患者取り違い）や都立広尾事件（消毒液静脈内投与）が起き、その後の医療事故に対して連日マスコミで報道されました。国もこの事態を重く見て、2001年「患者安全推進年」制定、2003年「医療安全支援センター」、 「医療に係る事故報告範囲検討委員会」設置、2004年「事例検討作業部会」設置、2009年「産科医療保障制度運用」開始、2015年「医療事故調査制度」施行と対策が進められました。

他の臨床分野に比べ医療安全の歴史は浅く、それ故、様々な切り口で研究を進められると考えています。これからますます重要視される分野であること、やりがいのある領域であると思いいこの分野に踏み入りました。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

「もし時間が戻せるなら、どの時代に戻りたいか？」と聞かれたら、私は大学3年生と答えます。部活動（ワンダーフォーゲル部）でも中堅となり、やりたいことを実行できる学年でした。また、臨床講義が始まり、医師に近づいたような気がした時期でもありました。学生時代に学ぶべきことは多々あります。勉学はもちろんですが、一人間として、一社会人として、一医療者として成長するには、教科書や辞書から学べないことも多くあります。たくさんの経験が未来につながるといっても過言ではありません。

私は医師になって目標とすべき4名の先生と出会えました。高山久美愛病院内科の武山直治先生、袋井市民病院外科の小山芳雄先生、愛知医科大学血管外科の加藤量平先生と太田敬先生です。それぞれ恩師には全く異なった個性がありますが、今でも「こんな時、この先生ならどんなふうを考えるのだろうか？」と考えてしまいます。

学生の皆さんもこれから目標とすべき先輩を見つけて、より良い医療者になって頂きたいと思っております。



病態治療学・教授

おおすか こうじ  
大須賀 浩二

— 教授就任に当たっての  
抱負を聞かせてください。—

看護学部のカリキュラムは、「教養科目群」、「専門基礎科目群」、「看護学専門科目群」によって構成されます。その中の、専門基礎科学系の病態治療学を担当させて頂くこととなりました。本学看護学部のホームページでも記載されていますが「専門基礎科目」は、看護専門職者としての基礎的な知識や看護実践能力育成の基盤となる人間と健康、取り巻く環境について理解を深めることを目指して、「人間の理解」、「健康の理解」、「環境の理解」で構成されています。人であれば誰しもが罹りうる疾患につき、あらゆる面からの理解が要求されているのが現状です。医学の進歩はまさに日進月歩の勢いで進んでおり、私の学生時代に学習した内容以上の知識を要求されています。私自身も今一度初心に戻り、看護学生さんとともに様々な疾患の病態につき、知識の整理をしていき、少しでも将来の看護における知識に役立つことがあるよう頑張っていきたいと思っています。

また、今まで行ってきたリサーチにおいても、脳神経外科疾患の慢性硬膜下血腫やくも膜下出血におけるシグナル伝達系を中心とした病態解明に心掛けていき、ここ愛知医科大学から広く全世界に情報発信していければと思っています。

— 現在の研究分野に進まれた  
きっかけを教えてください。—

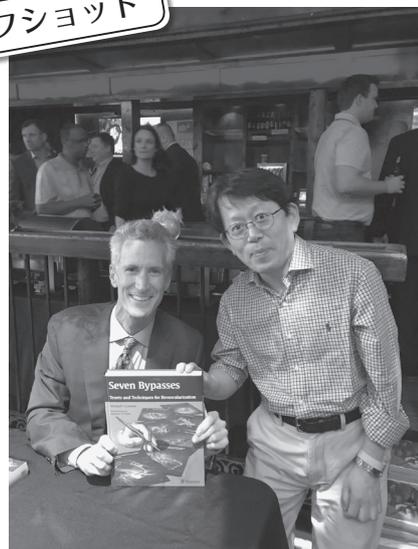
卒業後の全科ローテーション研修において、様々な科を研修させて頂きました。その中でも脳神経外科の患者さんにおいては、術前意識が極めて悪い方でも緊急手術によって、また、術後の看護師並びにリハビリなどコメディカルの方々の協力で劇的に改善をされる症例があり、強く感銘を受けたことがありました。また、当時ではまだ明らかなメカニズムの解明がされていなかったくも膜下出血患者術後において、手術は無事に終了し、意識状態も良好でしたが、術後1週間後頃から発生する脳血管攣縮にて、広範囲な脳梗塞となり命を落とされる方もみえました。このようなダイナミックに患者の状態が変化される科において、私も一役を担うことができればと思い、脳神経外科を専攻する運びとなりました。また、血管攣縮のメカニズムが解明できればと、大学帰局後基礎実験を開始し、リサーチの楽しさも味わってしまい、それが今に至っています。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

色々学習していかないといけないことばかりと思われそうですが、積極的かつ貪欲に医学知識を学んでいってください。その中で疑問に思うことがありましたら、なんなりと質問してください。一緒に疑問点が解決できるように勉強していきましょう。

また、医療はチームワークで成り立っていますので、クラブ活動や日常生活においても、人間関係の構築やコミュニケーション能力のスキルアップなど大学生時代でないとできない大切なことがあると思います。将来の自分自身を磨きあげるためにも、今の時間を有効に活用していってください。

オフショット



アメリカ脳外科総会でM.Lawton教授と



臨床実践看護学・教授

いずみ まさゆき  
泉 雅之

— 教授就任に当たっての  
抱負を聞かせてください。—

愛知医科大学を卒業して30年以上になりますが、その間、医学部での仕事以外にも、看護専門学校や看護学部で講義をする機会がありました。看護学生には疾患の病態やケアの講義を担当しましたが、医学部より限られた講義時間の中でどのように教えていくか苦心したことを記憶しています。

この30年余りの間に医学はめざましい進歩を遂げました。神経内科領域では、MRIの登場は言うまでもなく、超急性期脳梗塞へのrt-PA（アルテプラゼ）静注療法や、脊髄小脳変性症、筋強直性ジストロフィーなどで遺伝子診断が可能になったこと、アルツハイマー型認知症に対する抗認知症薬が登場したことなどなど、挙げたらキリがないと思います。

学生用のテキストも改訂を重ね、朝倉の内科学は第11版、ベッドサイドの神経の診かたは18版までになりました。しかし、最近の学生にはビジュアルなものを好む傾向があるようで、シラバス（教科案内）にはあまり記載がない「病気が…」シリーズに人気があるようです。確かによく書かれており、教員も学生に合わせていけないかと思ったりもしている今日この頃です。

今回、ご縁があって看護学部教授に就任しましたが、限られた講義時間の中でいかに上手に学生に教えていくか、医学部時代の経験をどのくらい活かせるか、頑張っってやっていきたいと思ひます。どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。

— 現在の研究分野に進まれた  
きっかけを教えてください。—

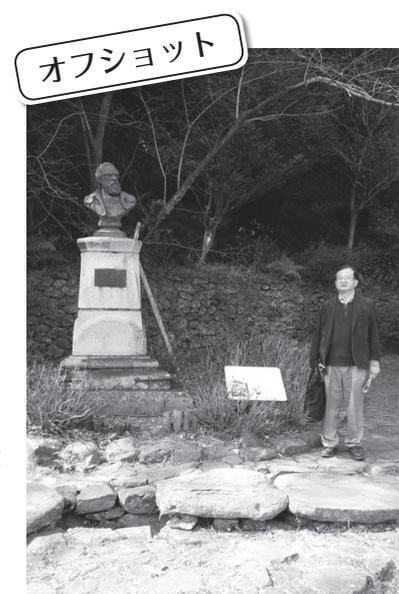
昭和61年に卒業後、初めは大学病院で主に一般内科と消化器内科を研修し、その後は国立名古屋病院（現在、名古屋医療センター）で主に脳卒中とてんかんを研修し、更に大学病院に戻ってからは主に神経内科と内分泌内科を研修してきました。平成7年に「脳血管障害発症後の視床下部-下垂体-甲状腺系ホルモンの変動に関する研究」で博士号を取得した後は、専ら脳卒中と内分泌との関連を研究してきました。この辺りが、現在の研究分野に進んだきっかけとなったのではないかと思います。脳卒中は症例が多く、内科学を始めとした学問の総動員が必要であり、臨床研究のやりがいがある分野でした。

また、平成16年から約4年間、今では抗認知症薬の一つになっているメマンチン塩酸塩の治験に参加してからは、認知症の治療にも積極的に関わるようになりました。平成25年9月に大学病院が認知症疾患医療センターに指定されてからは、精神神経科と協力して認知症の鑑別診断や啓蒙活動などに関わり、現在では脳卒中とともに重要な研究分野となっています。

— 学生へのメッセージをお願いします。—

医学や看護学に関しての知見は膨大な量になってきており、講義では全部を網羅してお話しすることは難しい状況になっていると思います。代表的なものを教えるのが精一杯で、その他は学生が自ら勉強（アクティブラーニング）をしないとイケないということもありえます。

しかし、大学では学生が一人でも多く試験に合格するようにカリキュラムは毎年改訂されています。学生は勉強に大変ですが、改訂する教員の作業も大変なのです。お互いに大変なのですが、大変な中にも楽しみを見つけてやってください。そして、国家試験を始めとした各種の試験に合格するように頑張ってください。



シーボルト像とツーショット  
(長崎市にて)

# 新入生ガイダンス実施

平成31年度入学生を対象としたガイダンスが、医学部は4月3日（水）～5日（金）・8日（月）、看護学部は4月2日（火）～5日（金）・8日（月）に実施されました。各新入生からは、入学の喜びの表情が溢れていましたが、ガイダンスが進むにつれて、これから始まる大学生活への真剣なまなざしが見受けられました。

## ◆ 医学部ガイダンス概要

日	時間	内 容
四月三日 (水)	8:50	医学部のカリキュラムについて ・1学年次のカリキュラムについて ・6年間のカリキュラムについて ・進級上の留意事項について
	10:30	授業、試験等の教務関係について
	13:00	国際交流に関する説明
	13:30	学生生活について
	14:00	新入生研修説明
四月四日 (木)	10:30	新入生研修 (プロフェッショナルリズムⅠa)
四月五日 (金)	8:45	新入生研修 (プロフェッショナルリズムⅠa)
四月八日 (月)	10:00	基礎科学ガイダンス
	10:20	学生相談室の紹介
	10:30	防犯講習会 ・防犯講話 ・防犯実技
	13:00	ハラスメント防止講習会
	14:00	健康診断
	16:00	SNS講演会



新入生ガイダンス（医学部）



新入生ガイダンス（看護学部）

## ◆ 看護学部ガイダンス概要

日	時間	内 容
四月二日 (火)	11:00	看護学部長挨拶
	11:10	教員紹介
	11:30	クラブアンケート
	11:40	写真撮影
四月三日 (水)	9:00	教務関係オリエンテーションⅠ (教育理念、教育目標)
	10:00	教務関係オリエンテーションⅡ (maharaの使用法)
	10:40	教務関係オリエンテーションⅢ
	11:40	教務関係オリエンテーションⅣ (実習について)
	13:00	教務関係オリエンテーションⅤ
	14:00	救命講習及び新入生研修 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの概要説明
	14:20	事務手続き及び連絡等
15:00	総合学術情報センター利用講習会 学務情報システム説明	
四月四日 (木)	9:30	学生生活関係オリエンテーション
	10:15	事務手続き及び連絡等
	11:10	傷害・賠償保険等の説明
	13:00	新入生研修Ⅰ 大学生としてのマナー 医療職者としてのマナー
	15:10	新入生研修Ⅱ 感染症と健康管理について 健康管理手帳の記入について
	17:00	教科書販売
	10:00	災害・防災対策について
四月五日 (金)	11:00	施設紹介 ・運動療育センター ・愛知医大サービス
	12:00	アドバイザーとの懇談会
	13:00	新入生研修Ⅲ キャンパスツアー
四月八日 (月)	10:20	学生相談室紹介
	10:30	防犯講習会
	13:00	ハラスメント防止講習会
	14:10	救命講習会
	16:00	SNS講演会

# 大学生としてのマナーを身に付けよう 新入生研修実施

本学では、医学部・看護学部ともに、大学生としての基本的なマナーを学び、医療人としての心構えを身に付けることを目的として、毎年4月に新入生を対象とした研修会をカリキュラムに導入しています。

## 医学部新入生研修

医学部では、平成31年4月4日（木）・5日（金）の2日間、サンプラザシーズンズ（名古屋市名東区）と大学本館講義室において、1学年次の授業科目「プロフェッショナルリズム1a」の一環として、新入生研修が実施されました。この研修は、医学生としての品位・品格、自ら学ぶ姿勢を身に付け、集団行動を通して、実践をためらう心理的抵抗（自分の殻）を打ち破り、これからの学生生活を円滑に過ごす基礎を築くことを目的としています。

研修は、若槻明彦医学部長のあいさつに始まり、祖父江元 理事長や伴信太郎医学教育センター長、石橋宏之 教務部長、本学卒業生である医学教育センターの早稲田勝久副センター長、青木瑠里講師からそれぞれメッセージが送られ、4日（木）の立食形式の夕食では、佐藤啓二学長の挨拶に始まり、祖父江理事長、若槻医学部長、基礎科学、基礎医学、臨床医学の各部門の教員と学生との親睦を深める良いきっかけとなりました。

また、両日を通して学生のコミュニケーション能力やチーム力を高めることを目的とした、コミュニケーション演習を行い、最後に、この2日間の新入生研修で感じた、学生生活での疑問や不安なこと、演習を通して役に立つと感じたものを学生間で共有し、レポートにまとめ研修を終えました。

## 看護学部新入生研修

看護学部では、平成31年4月4日（木）・5日（金）の2日間、講義室等において、大学生として学修に臨む姿勢や態度、医療職者としてのマナーなどを学ぶとともに、同級生、上級生、教員との交流を図ることを目的とした新入生研修が実施されました。

研修では、「大学生としてのマナーについて」と題し、株式会社マイナビ友松里枝氏による講演が行われました。続いて、上級生及び学生委員会委員から、医療職者としてのマナーについて講義が行われた後、「感染症と健康管理について」と題し、感染看護学の長崎由紀子准教授の講演が行われ、学生は熱心に聞き入っていました。

昼食時は、アドバイザー教員との懇談会が行われ、新入生たちは初対面で当初緊張した様子が伺われましたが、時間が経つにつれ、笑い声が聞かれ和やかなひとときとなりました。

5日（金）の午後からは、上級生の案内によるキャンパスツアーが行われ、学内の各施設について多くを知ることができました。その後、体育館に戻り愛知医科大学〇×クイズなどがあり大いに盛り上がりました。

最後に、上級生による学生間の交流会が開かれ、貴重な情報を得る機会となりました。新入生にとっては、これからの学生生活を送る上で、非常に有意義な一日になったことと思われます。



学生による意見交換



救命講習の様子

## 篤志献体者に 文部科学大臣から感謝状贈呈

本学の解剖学教育のために献体頂いた次の方々に対し、文部科学大臣から感謝状が贈呈されました。  
なお、感謝状の贈呈は、献体者のご遺族が受領を希望された方です。

安達 雪雄 殿	伊神 邦弘 殿	石田 源一 殿	伊藤 昌裕 殿	岩月 玲子 殿
江間 正一 殿	大賀 広実 殿	太田 豊 殿	大橋 三郎 殿	加賀 守光 殿
加古 きく 殿	片野 一夫 殿	上久保武夫 殿	神谷千賀子 殿	川口 凉子 殿
栗木 繁子 殿	澤田 町子 殿	鈴木 貞子 殿	鈴木千代子 殿	高田 園 殿
田中 二良 殿	寺島 鎬慶 殿	藤後 朝夫 殿	林 鈴子 殿	堀 まゆみ 殿
前川 貴男 殿	馬淵のぶ子 殿	三浦 勝雄 殿	村上うた子 殿	山内 伸恵 殿
吉田 金一 殿	渡邊 大祐 殿			(以上 五十音順)

## 平成30年度実験動物慰霊祭挙行

平成30年度医学部実験動物慰霊祭が、平成31年3月4日(月)午後1時30分から実験動物供養塔前において厳かに執り行われ、医学の教育・研究の発展のための礎となった諸動物の冥福を祈りました。

慰霊祭では、初めに本学の医学研究のために貢献した動物の諸霊に対し参加者全員で黙祷が捧げられました。引き続いて、若槻明彦医学部長から、瞑目した諸動物に対して、その尊い献身に感謝するとともに慰霊の辞として、医学研究の発展のため尊い犠牲となった動物たちの霊に哀悼の意を表し、今後とも動物愛護の精神に基づき、更に実験動物の愛護に努めることを誓いました。

その後、佐藤啓二学長、佐藤元彦総合医学研究機構長、松下夏樹動物実験部門長に続いて、日頃動物実験や飼育に携わっている教職員や学生一人ひとりから白いカーネ



慰霊の辞を述べる若槻医学部長

ーションの花が献花台に捧げられ、諸動物の冥福を祈りました。

## SNS講演会開催 ～被害者・加害者にならないために～

平成31年4月8日(月)午後4時から大学本館たちばなホールにおいて、医学部及び看護学部の新入学生を対象に、ソーシャルネットワークサービス(SNS)活用の際に知っておくべきモラルやリスクを学び、被害者にならないことはもちろんのこと誤った使い方により加害者にもならないことを目的とした講演会が行われました。

昨年度に引き続き講師をお願いした浜松学院大学短期大学の今井昌彦教授は、メディア画像と音響設備を駆使し、学生にとって身近な事例を用いながら、SNSのもつリスクを分かりやすく解説されました。

ネット社会の発展に伴う事件が増加する中で、安易に

SNSに投稿し被害が拡大していくことなど、今後どのように関わっていくことが大切なのかを考える良い機会となりました。

聴講した学生からは、SNSのもつリスクについての貴重な学びを得たという感想が数多く寄せられました。



## 防犯講習会・ハラスメント防止講演会開催

平成31年4月8日（月）午前10時30分から大学本館たちばなホールにおいて、医学部及び看護学部の新入生217名を対象に、愛知警察署生活安全課生活安全第1係巡査長の三浦佑紀氏を講師に迎え、防犯講習会が開催されました。

三浦講師からは、愛知県は侵入盗の発生が多いこと、玄関や居間の電気を1か所点けて外出するなど犯人に不在を悟られないような対策が必要との説明がありました。また、性犯罪について話があり、簡単な護身術の実演も行われました。最後に、DVD「STOP TO THINK！止まって考えようトラブルを防ぐインターネット活用術」を鑑賞しました。



講演する三浦巡査

続いて、午後1時から、21世紀職業財団客員講師の新美智美氏を講師に迎え、ハラスメント防止講演会が開催されました。

新美講師からは、大学におけるキャンパスハラスメントを中心とした基礎的な知識とともに、事例に基づき、ハラスメントの被害にあっているときの対処法や予防などについて詳細に説明がありました。また、気軽に相談ができる教員や友人を持つこと、そのためには日頃から良好な人間関係を築いておくことが重要であると強調されました。

この講演会で得た知識を活用して、ハラスメントのない大学生活を送ってくれることを期待します。



講演する新美講師

## 交通安全講習会開催

平成31年4月15日（月）午後6時から大学本館たちばなホールにおいて、愛知警察署交通課交通総務係警部補の大坪雅昭氏を講師に迎え、医学部・看護学部の学生を対象とした交通安全講習会が開催されました。【写真】

講演では、「必ずシートベルトを着用すること。同乗者の着用も確認して欲しいこと。」「信号がない交差点で自分の走行側に一時停止の表示がなくても減速し、自転車や車が飛び出してこないか必ず確認して欲しいこと。」「毎月11日を横断歩道の日として、横断歩行者を守ることに力を入れていること。」「夏場にかけて特に若い世代は車の速度が上がりやすい傾向があり、それに伴い交通死亡事故が多発していること。」などの講話がありました。

引き続き、実際に交通死亡事故でお子さんを亡くされた方のお話をDVDで視聴することにより、改めて交



通死亡事故の重さを痛感する機会となりました。

受講した学生（284名）にとって、この交通安全講習会を通じ、交通安全に対する意識を常に高く保ち、一人ひとりが交通安全に努めてくれることを期待します。

## 医学部学外体験実習体験記

平成30年度の医学部2学年次の地域社会医学実習は、平成31年2月4日（月）～8日（金）まで、各施設のご協力の下、昨年までの心身障害者施設での実習に加えて、児童養護施設での実習、長久手市役所や地域の事業所での産業保健インターン実習、更に消防本部での救急車同乗実習を行いました。学外での様々な経験により、医療人として社会に出るためのモチベーションが高まったようです。実習を終えた学生の感想文を紹介します。

### 実習現場で学んだこと

実習施設：瀬戸市消防本部  
2学年次生 有働知佐子

地域社会医学実習で救急車同乗実習ができること初めて聞いた時から絶対にその実習がしたいと思っていたほど、2日間の実習をとっても楽しみにしていた。今回の実習で最も印象に残ったことは、救急救命士さんのコミュニケーションの取り方だ。病院との連携、患者・家族への対応の二つの場面で印象に残っている。

一つ目は、実習が始まって最初の出動の時に感じた。一件目の出動は、救急車内部を見学させて頂いた直後だった。出動要請がかかってから救急車が出るまではほんの数秒。想像以上に早く、緊急性を実感した。その中で、受け入れ可能な病院を探したときに大きな違和感を感じた。

まず、2件の病院に電話をかけるも受け入れは不可。次に心電図にST上昇を確認した。胸痛はなかったが、一番近くの病院に再び電話をかけるも受け入れ不可。最終的に3件目の病院へ搬送すると決定したころには病院を探し始めてから20～30分が経過していた。そして病院に着いた頃には、通報を受けてから約1時間が経過していた。搬送先の病院の先生も「かなり時間がかかったけど、病院がなかなか決まらなかったの？」とおっしゃっていた。

通報から病院に着いて治療を受けるまでにできる限り患者さんの状態を悪化させないことが救急救命士の役割だと聞いたので、救急車と病院との連携が上手くいくことが大切だと実感した。コミュニケーションという観点では、救急救命士さんによる、現場の状況と患者さんの状態を短い時間で適切に病院側に伝える技術の必要性を感じた。以前、愛知医科大学病院の救命救急センターで実習させて頂いた時、救急車から連絡を受ける側の立場で、患者さんについて知りたい情報が適切に連絡されないことに対するもどかしさを感じていたために、電話による口頭の言語のみでの伝達の難しさを改めて実感し

た。また、病院一つひとつに連絡を入れる様子を見て、同時に複数の病院に情報を伝えることができるようになるなど、より効率を上げ、救急車、病院間の連携が早く、上手くいく方法はないのかと思った。

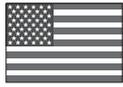
実習終了後の報告会では、別の消防署に行った人から三次救急の患者さんを搬送するときの対応が、一・二次救急とは違うと聞いた。センターから消防署に連絡が入った時点で搬送先の病院を決めるそうで、患者さんの容体により対応の違いが出ることを知った。三次救急の場合の対応もこれから学びたいと思った。

二つ目の患者さんやご家族に対する対応としては、実習全体を通して一番救急救命士さんの妻さを実感した面であり、報告会でも多く話題に挙がった。患者さんごとに合わせた対応、ご家族や付き添いの方を安心させるような声掛けなど。実習を通して救急救命士さんは医師よりも、患者さんやご家族に親身になり、言葉を選んで、短い時間の中で適切に情報を引き出し、必要な情報と意思を伝えていると感じた。

医師は、様々な器具を用いたり、薬剤を投与したり、技術的な面では優れているが、救急車を呼ばないといけないような状況になり一番不安な時に患者さんやご家族と接し、不安を和らげる救急救命士さんの方が、接し方の面では圧倒的に優れていると感じた。

私は、患者さんやご家族に寄り添った医療を提供できる医師になりたいと考えているため、そのために必要なコミュニケーション能力は救急隊の方々から学ぶことが多くあると感じた。そして、それは今回の場合に限らず、様々な場面で医師以外の方々から学ぶことは多いと思う。病院という狭い環境に捉われずに日頃からアンテナを張って、多くのことを吸収していく姿勢を持ちたいと考えた。

## 国際交流



### ケース・ウェスタン・リザーブ大学教員招聘

看護学部では、平成31年2月19日(火)～2月24日(日)までの日程で、学術交流協定締結校のケース・ウェスタン・リザーブ大学(アメリカ合衆国オハイオ州クリーブランド市)から、Amy Bieda氏(看護学部学士課程ディレクター)とLatina Brooks氏(大学院看護学研究科修士課程ディレクター)を招聘し、相互の交流を図りました。

今回の招聘では、教員・看護師・学生を対象とした2回の講演会(テーマ1:「米国における看護師と看護学部教員の共同研究」、テーマ2:「ケース・ウェスタン・リザーブ大学看護学部における学士課程教育カリキュラムの特徴」と教員との交流セッション(テーマ:「日米におけるナース・プラクティショナーの教育と実践」)を開催するとともに、みんなのかかりつけ訪問看護ステーション及びメイトウホスピタルの視察を行いました。

ケース・ウェスタン・リザーブ大学と本学とは教員の相互派遣や学生の短期留学を実施しており、今後の学術交流の発展に向けて大変有意義な招聘となりました。



理事長表敬訪問



学長表敬訪問

## 看護学部一日体験入学開催

平成31年3月22日(金)看護学部実習室において、看護学部一日体験入学が開催されました。【写真】これは、高校生を対象として、看護学部における講義の実際を体験することで、大学で看護学を学ぶことへの関心を深めて頂くことを目的として開催されています。

当日は、40名の高校生が参加し、午前中の体験授業(テーマ「こころの回復を促す精神看護-こころ病む人を支えるコッー」)では、緊張する中で皆真剣に聞き入っていました。

体験演習(テーマ「看護における精神療法的アプローチ-コラージュ療法の体験-」)では、やりたいことやなりたいものを思い浮かべ、雑誌を見ながら気に入った写真を切り取り、画用紙に思い思いに貼り付けコラージュ作品を作成しました。また、完成した作品についてグループでシェアし全体発表を行いました。コラージュ療法を通して相互交流を深めるとともに、思ったことを作品で表現することを学ぶ機会になりました。

昼食は、アシスタントを務める看護学部生と歓談しながら交流を深め、午後からはドクターヘリ、ドクターカーを見学しました。



参加した高校生からは「学校の雰囲気・魅力が詰まっていたとても良かった、愛知医科大学で学びたいと思いました。」「体験授業で精神看護を学ぶことができ良かった。」「先輩に学校生活や勉強方法などを直接聞いて良かった。」「ドクターヘリを間近で見ることができて良かった。」などの感想がありました。

参加された高校生の皆さんにとっては、貴重な体験を通してとても有意義で充実した一日となったことと思われます。

## 平成31年度看護学部臨床教授等辞令交付式挙行

平成31年4月23日(火)午前9時から病院看護部管理室において、平成31年度看護学部臨床教授等辞令交付式が行われました。今年度は、愛知医科大学病院及び他施設を含め、新たに臨床教授5名、臨床准教授7名、臨床講師3名が選考されました。このうち、本院勤務の方に、坂本真理子看護学部長から辞令が手渡されました。【写真】

看護学部では、平成20年4月から、臨地における指導体制の充実を目的として、臨床教授制を導入しています。本制度では、豊富な臨地実習指導経験と優れた看護実践能力及び教育能力を持つ看護職員に臨床教授等の称号を授与し、教員とともに、学生の指導を行って頂いており

ます。学生にとっては、的確な実習指導を受けるとともに、将来の目指す看護職者の姿が明確となる機会となっています。



看護学部は今後も臨床教授等の皆さま方と連携・協働し、豊かな人間性と確かな看護実践能力を備えた看護職者の育成を進めて参ります。

## 「病院と地域の看護師連携によるシミュレーション教育」セミナー開催

平成31年2月2日(土)シミュレーションセンターにおいて、平成30年度看護実践研究センターの新たな企画として、入院治療から在宅療養へのスムーズな移行のための看護師間の連携を目的とした模擬患者(SP)を活用した「病院と地域の看護師連携によるシミュレーション教育」セミナーが開催されました。当日は、本学教員2名、学外から診療看護師1名と訪問看護師3名の協力を得て実施し、病院看護師8名と訪問看護師10名の計18名の参加がありました。

シミュレーションでは、呼吸困難と発熱のある患者2名のシナリオを題材に、病院における退院支援の場面と退院1か月後に緊急コールで訪問した在宅での場面を実施しました。実施においては、訪問看護師が病院での退院支援を行い、病院看護師が在宅での訪問看護を行うという日頃の看護活動とは逆の役割行動としました。場面ごとにケアについて振り返り、看護の視点についての気づきを深めることができました。

参加者からは「訪問看護師と病院看護師の視点の違

い」,「カルテ情報に捉われず、目の前の患者から情報を集めること」,「患者さんなりの生活をきちんと認める力」が重要であることや「看護師の持つ知識量によって患者の未来が変わってくる」など、入院患者や訪問看護の利用者を生活者として捉えることの気づきがあり、シミュレーションを通して学ぶことができました。また、参加者全員から病院あるいは事業所での看護活動に活用したいとの声がありました。



SP参加による退院支援

今後は、今回の研修成果をもとに、看護師間の連携を充実するとともに地域連携の促進に貢献していきたいと思えます。

## 平成30年度看護学研究科統計セミナー開催

看護学研究科において、平成30年度は、計5回の統計セミナーが開催されました。【写真】

本セミナーは、臨床研究支援センターの大橋渉准教授を講師とし、看護学研究科の学生及び看護学部教員を中心に、病院職員を含めた全職員を対象として開催されました。研究における統計学的分析手法の基礎知識を習得する講義・演習となっており、参加者からは、「苦手意識のある統計を分かりやすく、丁度良い時間で講義して頂き勉強になった。」などの感想がありました。

看護学研究科では、今後も研究力の向上を図っていきます。2019年度も開催予定ですので、皆さまのご参加をお待ちしております。



〈平成30年度開催の統計セミナー〉

日時	テーマ	場所
6/28(木) 18時～19時	研究における統計学的分析手法の基礎知識を習得する	看護学部棟 N203講義室
8/30(木) 18時～19時	「文献を読み解く!その1」 ～ANOVAの適用条件、F値とF検定、多重比較法～	看護学部棟 N201講義室
10/25(木) 18時～19時	調査票作成入門 ～信頼性、妥当性とは何か?～	看護学部棟 N201講義室
12/17(月) 18時～19時	主成分分析と因子分析	看護学部棟 N202講義室
2/13(水) 18時～19時	共分散構造分析	看護学部棟 N203講義室



## ルール大学留学体験記

本学では、ドイツのルール大学（RUB：Ruhr Universität Bochum）医学部と平成23年度に学術国際交流協定を締結して以降、学生の交流活動を中心に積極的に活動しております。そのプログラムの一環として、臨床実習選択（elective）コースへ本学医学部学生を派遣しています。

平成30年度のプログラムとして、平成31年2月16日（土）から3月17日（日）まで2名の学生が留学しました。この留学を終えた学生から寄せられた体験記をご紹介します。

医学部6学年次生 太田 航貴

今回、ドイツのボーフムという都市にあるルール大学の放射線科にて、4週間実習させて頂きました。実習先の先生やスタッフは優しく接して頂き、非常に楽しく実習することができ、多くのことを学ぶことができました。

また、現地の学生の実習に対する積極性が非常に印象的でした。彼女らは学生として見学や実習をさせて頂くのではなく、チームの一員として行動し、医療に携わる一人のスタッフとして実習に取り組んでいました。そのため、臨床の能力という点では差を感じてしまいました。こうした差に悔しさを感じる一方、取り組み方や心構えの違いで、学生の時点でここまでのスキルを身に付けることができるということを知ることができました。

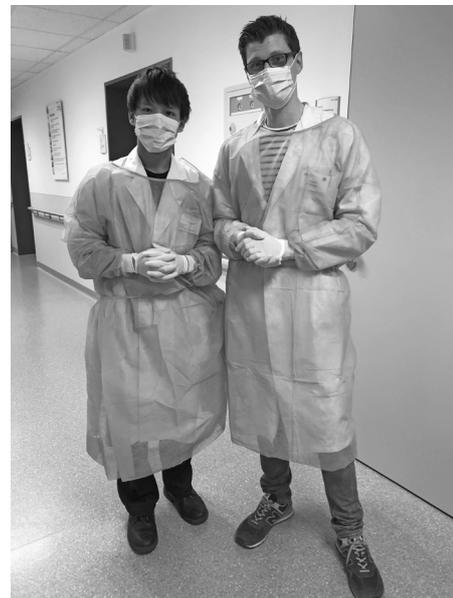


太田さん（中央奥）

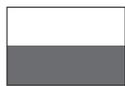
医学部6学年次生 亀井 洸介

私は、5学年次生の時にクリクラ2の実習の一貫としてドイツのルール大学の小児呼吸器内科で実習させて頂きました。4週間という長いようで短い期間でしたが、呼吸器内科の専門的な内容だけでなく、ドイツの医療体制や医学への取り組み方を実感し、日本とドイツの違いについても多くのことを学ぶことができました。

ドイツでは、医学生と先生の立場がほとんど対等であり、多くの意見交換の場やセミナーなどで、積極的に発言したり、教えてもらいに行くことの大切さを実感することができました。この4週間で感じた積極性などを、今後の実習や将来の仕事に繋げ、主体的に学ぶきっかけにしたいです。



亀井さん（左）



## ウッチ医科大学留学体験記

本学では、ポーランドのウッチ医科大学（MUL：Medical University of Lodz）と平成27年度に学術国際交流協定を締結して以降、学生の交流活動を中心に積極的に活動しております。そのプログラムの一環として、臨床実習選択（elective）コースへ本学医学部学生を派遣しています。

平成30年度のプログラムとして、平成31年2月16日（土）から3月17日（日）まで4名の学生が留学しました。この留学を終えた学生から寄せられた体験記をご紹介します。

### 医学部6学年次生 浅井 優

海外留学の機会を頂き、様々なことを学ぶことができました。私は脳神経外科と耳鼻咽喉科を2週間ずつ実習しました。初めてポーランドに来て街並みも人々も日本とはかなり異なっていましたが、医療に関しては共通部分も多いことを知りました。

患者さんは現地の言葉を話すので意思疎通を図ることは難しいですが、担当医や学生が英語に訳してくださり理解することができました。言葉の壁や文化の違いを乗り越え自国を見つめ直すことで、これからの日本の医療に必要なものを考える貴重な経験となりました。



浅井さん（右）

### 医学部6学年次生 木下 聡子

実習中、ポーランド語が全く理解できなかったのはもちろんですが、他大学から来た留学生の英語能力の高さを痛感し、自分がいかに今まで医学英語の勉強が足りていなかったのかを思い知り、落胆しました。しかし、そのおかげもあり、英語学習のモチベーションの向上に繋がっています。

初めての海外長期滞在で出国前は不安もありましたが、実習の合間に現地の学生や他国からの留学生との貴重な出会いや交流もあり、非常に充実した日々を過ごすことができました。この留学に参加でき、素晴らしい経験ができたことに心から感謝しています。留学に興味のある人は諦めず、できるだけ早い段階から準備をしておくのが良いと思います。



木下さん（左から2番目）

### 医学部6学年次生 川野 莉奈

ポーランドでの4週間は非常に満足度の高いものとなりました。現地の学生はみな積極的で、自ら進んで診察し、分からないところがあればその場で先生に質問し解決していました。そのような姿勢に感化され、私も積極的に取り組むことでより多くのことを吸収できたと思います。また、医療だけでなくポーランドの文化や歴史を学び、様々な価値観の人たちと出会ったことは自分自身の成長につながりました。今後もこの留学経験を糧に、色々なことに挑戦していきたいです。



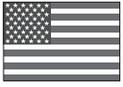
川野さん（右から3番目）

### 医学部6学年次生 関戸 彩子

私は、神経内科と腫瘍外科を2週間ずつ選択しました。神経内科では毎朝回診があり、その後、現地の医学生と担当患者の診察を見学したり、講義や検査の見学をしたりしていました。また、腫瘍外科では毎朝9時から手術があり、乳癌や皮膚癌、腹部腫瘍など様々な腫瘍の手術を見学しました。

病院内外で先生方や現地学生に大変お世話になり、ポーランド滞在中は文化や医療の違いなど刺激的な毎日、とても貴重な経験をすることができました。また、留学を通して、同年代の医学生の積極性や自主性の高さに驚く場面が多く、語学力や国家試験対策にとどまらない勉強の大切さを痛感しました。





# ケース・ウェスタン・リザーブ大学短期留学体験記

看護学部では、米国ケース・ウェスタン・リザーブ大学フランシス・ペイン・ボルトン看護学部と教員・学生の交流を含む包括的な相互交流を行っています。平成31年3月に看護学部生6名が留学しました。短期留学を終えた学生の体験記をご紹介します。

## Case Western Reserve University 短期留学での学び

看護学部4学年次生 磯村 由紀江, 黒木 さおり, 中島 千絵, 中村 遥香, 平手 陽菜, 松崎 華江

平成31年3月16日(土)から25日(月)までの10日間にわたり、私たち4学年次生6名(渡航時は3学年次生)は、アメリカ合衆国オハイオ州にあるケース・ウェスタン・リザーブ大学(CWRU)フランシス・ペイン・ボルトン看護学部(FPB)での短期留学に参加しました。様々な病院や施設を見学させて頂くことで、数多くの学びがありました。

プログラムの前半2日間で、CWRUにて講義、演習、実習、その他多彩なプログラムに参加しました。私たちの授業構成とは異なり、講義・演習・実習が一連のサイクルとして位置付けられていることや、最新技術を活用した教材、地域での活動など様々な工夫がなされていました。講義では学生は食べ物や飲み物を片手に参加していましたが、講義のメモは主にパソコンを使用し、積極的に質問・発言することで講義に参加していました。日本の教室ではあまりみられない風景でしたが、飲食などの環境整備よりも、自分たちの自主性が大切であると強く感じました。私たちも自主性を尊重し、積極的に発言することでより深い学びを得ていきたいと思います。

プログラム後半には、CWRUと連携している病院や施設の見学・体験をしました。見学した病院の一つに小児病院があります。ここでは、病院らしさを感じさせないカラフルな壁や装飾、動物などの絵や人形が飾られているなど、対象の患者に合わせた環境が作られており、患者中心の医療について学ぶことができました。また、訪問看護の見学では、利用者の人種は多様で、生活環境もエリー湖畔の高級住宅から貧困層の暮らす住宅まで経済状況も様々でした。このことから、ホームケアは継続的に医療を利用でき、かつ比較的安価であることから、貧困層の人々にとってなくてはならない制度であることがわかりました。特に現在のアメリカでは病院の在院日数が日本よりもはるかに短いため、訪問看護の重要性を感じました。

また、看護師や学生の患者との関わり方がとてもフレ



短期留学修了式での集合写真

ンドリーであると感じました。病院実習に参加した時、初めは単にフレンドリーで良いと感じただけでしたが、患者との接し方の違いには日本とアメリカの文化の違いが大きいということに気づきました。入院患者を画一的な規則で管理するのではなく、それぞれの患者の宗教や文化を尊重した関わり方をしているということです。アメリカには多様な宗教を持つ人が暮らしており、例えばお祈りの時間は病室に立ち入らないようドアに張り紙がしてあるなど、それぞれの宗教に配慮した看護が実施されていると感じました。生活や文化に配慮したケアは患者を安心・安楽にさせ、看護師とより信頼関係が生まれやすくなり、フレンドリーな関係に繋がるのではないかと考えました。患者の個性に合わせた看護をすることは大事なことだと改めて学びました。

今回、アメリカの医療や看護を実際に見学・体験したことで、日本のケアだけでなく、広い視野で看護を捉え、そして考えることができました。私たちはあと1年ほどで臨床に出ます。日本の看護の良い点に加え、アメリカの看護の良い点で日本でも取り入れられるものは積極的に取り入れ、自らの看護に生かしていきたいと思います。

最後に、引率して下さった阿部恵子先生を始めとし、国際交流委員会の先生方及び事務の方々など、多くの方々のお力添えによってより良い留学となりました。この場を借りてお礼申し上げます。



# マハサラカム大学短期留学体験記

看護学部では、タイ王国マハサラカム大学看護学部と教員・学生の交流を含む包括的な相互交流を行っています。平成31年3月に看護学部生4名が留学しました。短期留学を終えた学生の体験記をご紹介します。

## Mahasarakham University 短期留学での学び

看護学部4学年次生 伊藤 早紀, 大橋 茉由, 森田 絵万  
3学年次生 松尾 如恵

平成31年3月16日(土)から24日(日)までの9日間にわたり、私達4名はタイ王国マハサラカム大学看護学部での短期留学に参加をしました。

タイの医療体制は日本とは異なり、プライマリーケアが充実しています。地域住民の健康に関して、まず村レベル(村保健ボランティア施設)で予防活動が行われ、タンボンレベル(PCU:プライマリ・ケア・ユニット)で医療専門職者である看護師・保健師が把握、一次医療を実践します。その上で必要時、郡レベル(地域病院)につなげ、高度な医療が必要な場合に県レベル(広域病院、総合病院)を受診するというシステムです。

この短期留学では、大学病院や地域病院からプライマリーケアセンター、村保健ボランティア施設まで、レベル別に分かれているタイの医療施設の見学をさせて頂いたことで、タイの医療体制を肌で感じることができました。実際に、村保健ボランティアの活動に参加し、家庭訪問や疾患を持つ人々と接した際に印象に残っている村人の言葉があります。「村の人はみんなが親戚」という言葉です。この言葉からも、地域の人々のあたたかい「つながり」が感じられます。この「つながり」が生まれたのは、タイの医療制度の中で地域医療が大切にされており、地域で人々を支え合う仕組みが整っているからこそであると感じました。超高齢社会である日本にとって、地域住民が安心して生活していくには、専門職とのつながりのみならず、地域住民同士や専門職以外とのつながりも大切になっています。コミュニティの中の「つながり」という面で、タイから学ぶべきことはたくさんあると感じました。

タイでは、西洋医学も行われつつ、大きな手術が必要にならないようにその予防として伝統医療が広く浸透していました。私達は伝統医療の講義を受け、ハーブボールの作成やタイマッサージについて教えて頂き、様々な治療方法をもって医療を行っている実践を体験することができました。

また、Citizen Schoolというマハサラカム大学が独自で行なっている高齢者を対象とした講座に参加しました。これは、高齢者が健康に関することを学ぶことで、

高齢者自身が生活習慣病などの疾患の予防や健康の維持・増進をすることと、高齢者が暮らしている地域の保健医療ボランティアとして活躍することを目的とした取り組みです。講座参加者との交流では、生き生きとした高齢者の姿が印象的でした。マハサラカム大学看護学部では、Citizen Schoolの高齢者と学生がペアとなって実習をする機会があるそうです。この実習を行うことで、看護学生は高齢者からコミュニケーションの方法や様々な知恵などを学ぶ機会になり、高齢者は看護学生から専門的な知識を得る機会になっていることを知り、とても良い取り組みだと思いました。本学看護学部は、他学部と関わる機会や協働して何かをする機会は少ないので、今後そのような機会ができれば良いと思いました。

留学プログラムの最終日には、マハサラカム大学の学生と私達で互いに研究発表を行い、意見交換をしました。英語での研究発表と質疑応答は、準備を含めてとても大変でしたが、マハサラカム大学の先生から「お互い英語は流暢ではなくても、チャレンジして分かり合おうとすることが重要である。」との助言を頂きました。その後の意見交換の際に、タイの学生の主体的に学ぶ姿勢を感じ、同じ看護学生としてたくさんの刺激を受けました。

今回、マハサラカム大学のスタッフを始め、タイの人々がとても暖かく私たちを受け入れてくださり、多くのことを教えてくださいました。昨年夏に、マハサラカム大学から本学に短期留学をした看護学生の仲間とも再会し、国や言葉を超えて同じ看護を目指す学生同士の交流も深まりました。最初は、言葉もなかなか通じず、緊張や不安がありましたが、同じ医療を学ぶ学生や地域で暮らす方々との交流ができ、とても充実した留学となりました。

日本とは違う景色や文化、医療、地域を目にし、感じて、毎日が本当に新鮮でした。今回の留学で学んだことを生かし、主体的かつ広い視野を持つ看護職者になりたいです。

今回の留学に際し、お世話になりましたマハサラカム大学の先生方、各施設の方々、地域住民の方々、学生さん、そして本学の先生、事務の方々に感謝をいたします。



Kalasin 保健ボランティア施設にて



マハサラカム大学病院の伝統医療センターにて

## 定年退職教授最終講義

今年3月で定年を迎えられた5名の教授の最終講義が大学本館たちばなホール及び看護学部N301講義室において行われました。長年にわたり本学の発展に多大なる貢献をして頂き、また、本学の医学・看護学教育に対しご尽力くださいました先生方の講義には、学内外から多数の方が聴講に訪れました。ここに、先生方の最終講義の様子についてご紹介いたします。

### 形成外科

横尾和久 教授 2月13日(水)

#### 【形成外科学の発展期を生きる】

横尾先生は、昭和62年7月にご着任以来、診察、医学教育、大学での研究者の育成等を中心に、大変な熱意を持って教育・研究指導に当たってこられました。また、平成18年4月から現在まで形成外科部長として、本学及び大学病院の発展に尽力されました。この間、あざのレーザー治療や熱傷の集学的治療に本邦でいち早く取り組み、中でも本邦初の自家培養表皮の臨床応用による、全身広範囲熱傷患児の救命に成功したことは特筆に値します。この功績により、本院救命救急センターが熱傷患者を多く受け入れる施設となり、地域でも有数の熱傷専門病院として広く認知されています。

平成18年4月以降、大学病院内褥瘡対策委員会のチームリーダーを務められ、チーム医療としての褥瘡対策を充実させるとともに、平成24年2月には、第8回日本褥瘡学会中部地方会学術集会会長として、チーム医療としての褥瘡対策の認知と普及に大きく貢献されました。

最終講義では、学生時代に聴講した皮膚科の特別講義で、のちの恩師となる井澤先生が、交通外傷や不適切な初期治療による悲惨な熱傷後遺症も、形成外科の手術をすれば、ここまで治るといってお示しになり、ずいぶん心を動かされたことが、形成外科の道に進むきっかけ



けとなったこと、中京病院に在籍中に、自家異種混合移植の修得を目的に、上海第二医学院附属瑞金医院（現：上海交通大学医学部）焼傷科に留学されたこと。続いて、熱傷治療、あざ治療、再建手術で外科系全科のニーズに対応可能な体制づくり、機能と整容の両面の改善を目指す抗加齢治療について、多くの写真や資料・データを用いて詳しくお話しくださり、本院形成外科の進歩に多大なる貢献をされたことが良く理解できる講演でした。

講義の最後には、これまで関わりのあった方々への感謝の言葉とともに、愛知医科大学のますますの発展を祈念していると話され、講義を終えられました。

### 脳神経外科学講座

高安正和 教授 2月15日(金)

#### 【脳神経外科の勧め】

高安先生は、平成18年4月に本学にご着任以来、臨床、教育、研究面で大きな熱意を持って、本学及び脳神経外科講座の発展に尽力をされました。また、平成22年6月から現在まで副院長、平成24年10月から脊椎脊髄センター長を務められ、更に平成23年4月から現在まで長期にわたり医療安全管理室長を務めるなど病院の医療安全面に尽力されました。一方で、学外においては、名古屋高等裁判所、名古屋地方裁判所管内の医療訴訟連絡協議会幹事として社会活動にも貢献されました。

脳神経外科学全般について広い知識と経験を有しておられますが、特に脳血管障害と脊椎脊髄疾患についての基礎・臨床研究に携わってこられました。また、本学着任後は主に脊椎外科臨床の発展に尽力し、頭蓋頸椎移行部の外科、頸椎手術、低侵襲脊椎脊髄手術の分野では全国的にも高い評価を受けておられます。

最終講義では、脳神経外科医として歩まれた40年間を振り返りながら、脳神経外科の面白さを少しでもお伝えできればと思うお言葉に始まり、脳神経外科の特徴は、「外科医の目と技を持った神経系総合医」と言われており、これは、脳神経外科学会が作ったキャッチフレーズであるが、脳神経外科の本質であると説明されました。また、脳神経外科医を選んだのは、学生時代に、名古屋



大学脳神経外科教授の杉田慶一郎先生の顕微鏡手術をみて感動したことがきっかけであること、研修医時代に教わった英語の大切さ(手術記事は英文で、論文は英語で)、脳神経外科は脊椎脊髄疾患も大切であること、米国留学の勧めの三つを忠実に守ったこと、留学時代のこと、また、主たる研究課題である低侵襲脊椎脊髄外科、頭蓋頸椎移行部の外科治療、脊椎脊髄腫瘍の外科治療等の脳外科手術の症例について、多くの資料・データや写真を提示して詳しく講義をしてくださり、先生のこれまでの業績を改めて知ることができました。

講義の最後には、今まで関わってこられた多くの皆さまへの感謝の意を表され、講義を終えられました。

## 病理学講座

池田 洋 教授 2月20日（水）

### 【愛知医科大学と共に、46年】

池田先生は、本学医学部の第2回卒業生であり、ご着任以来、医学部学生に対する講義・実習、大学院での研究者の育成など、大変な熱意を持って教育・研究指導に当たってこられました。

本学卒業後、同年4月に第1病理学講座に助手として入局されてからは、大学病院に於ける病理解剖（当時、年間100体を越える）実施に貢献し、病理解剖報告書の作成、臨床病理検討会の開催に貢献されました。加えて、大学院生の研究指導（学位授与）、病理学講座の運営に尽力され、研究環境を整えるために受託事業（病理診断業務）を展開し、研究費確保をすることにより、医局員の研究が円滑に実施できるように配慮されました。その結果、多くの研究業績を上げており、医局員の多くは、科研費を毎年獲得できる状況が続いています。平成18年から平成22年には、国際交流委員会委員長を務め、南イリノイ大学医学部との学生交換留学制度の発展に貢献されています。

学外においても、愛知県剖検運営委員会委員、更に、平成18年から診療行為に関連した死亡の調査分析事業の愛知県代表として、引き続き、医療安全調査機構の統括調査支援医として社会活動にも貢献されました。また、本学同窓会の発足にも尽力され、これまでに、副会長、会長を歴任し、現在の同窓会の発展にも貢献してこられ



ました。

最終講義では、本学の発展・沿革、学生時代、第1病理学講座入局時代のこと、続いて、留学の勧め、交際交流（南イリノイ大学医学部）、永年にわたって従事された自己免疫疾患の機序の解明、消化管傷害機構、修復機構の研究のこと、教育・指導医養成研修等への取り組みや医療安全調査機構との関わり、ランニングとの出会い等、先生の46年にわたる歩みを、多くの資料や写真を用い、ユーモアを交えながらお話をいただきました。

講義の終わりには、これまで関わりのあった多くの方々、両親、奥様への感謝の言葉とともに、愛知医科大学のますますの発展を祈念していると話され、講義を終えられました。

## 睡眠科

塩見利明 教授 2月27日（水）

### 【愛知医大47年：睡眠研究はなぜ必要なのか】

塩見先生は、本学医学部の第1回卒業生であり、ご着任以来、診療、医学教育、研究面で大変な熱意を持って本学及び睡眠科の発展に尽力されました。

本学卒業後すぐ、臨床研修医として本学附属病院の第3内科に入局後は循環器グループに所属され、平成16年10月から平成19年12月まで睡眠医療センター教授、平成20年1月からは睡眠科教授に就任され、本学及び病院睡眠科、並びに大学院医学研究科臨床医学系睡眠医学の発展に尽力されました。また、平成12年7月から現在まで中央診察部の睡眠医療センター部長を務め、平成20年1月には独立診療科として睡眠科を立ち上げるなど、睡眠医学の教育及び医療の発展に尽力されています。

学外においても、日本睡眠学会の理事を始めとする多くの学会等の役職を務められました。また、愛知県長久手市地域保健対策推進協議会成人部委員などの社会活動にも貢献されています。永年にわたって循環器疾患における睡眠時無呼吸症候群（SAS）の合併とその意義に関する研究に従事され、循環器領域に睡眠医学を広められました。また、睡眠科として、SAS以外の睡眠障害の研究にも積極的に取り組み、特に平成29年2月に開設した起床困難・不登校外来は医学のみならず教育関係者からも広く注目を浴びています。



最終講義では、大学時代のこと、旧第三内科時代のこと、続いて、睡眠科・睡眠医療センター設立、睡眠時無呼吸症候群、起床困難・不登校外来等の症例について、多くの資料・データや写真を提示して詳しく講義をしていただきました。これは、先生が恩師からの教えである、「臨床で気づいた疑問を、基礎医学的に研究して、再び診療に還元しなさい」という教えを現在に至るまで継続されてこられたことを伺うことができる興味深いものでした。

講義の最後には、本学に入学して47年間、これまで関わりのあった多くの方々への感謝の言葉を述べられ講義を終えられました。

## 病態治療学

衣斐 達 教授 2月18日(月)

### 【卒後40年、臨床・研究・教育を振り返って】

衣斐先生は、昭和60年4月に内科学第4講座(神経内科)にご着任以来、診療、医学教育、研究面で大変な熱意をもって本学及び内科学講座(神経内科)の発展に尽力されました。また、平成13年2月から平成18年3月まで、神経内科副部長、平成16年4月から平成18年3月まで、病院病理部副部長などを併任され、大学病院の運営と発展に貢献されました。

また、平成18年4月から看護学部病態治療学の教授として着任され、看護学部学生に対する講義において、大変な熱意をもって教育指導に当たってこられました。看護学部では各種委員会の委員長を務められたほか、平成20年4月から平成26年3月まで教務学生部長、平成26年4月から平成28年3月まで看護学部長及び看護学研究科長並びに大学理事・評議員、平成28年4月から平成30年4月まで看護学部長補佐に就かれ看護学部、看護学研究科の教育及び運営に手腕を振るわれました。

最終講義では、専門分野である筋病理の研究成果についてお話を頂き、数多くの筋生検を実施されてきた上で症例研究など多くの写真や資料・データを用いて詳しく講義して頂きました。これは様々な筋疾患及び神経疾



患の特徴を研究し、疾患の原因究明に尽力された業績を伺い知ることができるものでした。また、看護学部では科目責任者として担当された病態治療学や人間学など、教育内容のお話を頂き、特に人間学において講義されていた終末期医療と関連する死生観・人生観について、多くの文献や教育経験で得たデータを用いて詳しく講義して頂きました。

最後に、本学に着任されて34年という人生の半分以上を過ごされた中で、関わった方々への感謝の気持ちを伝えられ、講義を終えられました。

## —退職を迎えて—

### “長年の勤務お疲れ様でした”

長年にわたり本学に勤務され、本年3月31日をもって定年退職又は期間満了退職された方々から寄せられたメッセージをご紹介します。

なお、定年退職後も再雇用等により本学にご尽力頂ける方もみえますので、引き続きのご活躍をご期待いたします。



池田 洋 先生  
(病理学講座・教授)

### 愛知医科大学と共に 46年

昭和48年4月に本学の2回生として入学、昭和54年4月に病理学講座に助手として入局しました。以後、講師、助教授、教授として、46年の長きにわたり愛知医科大学とともに過ごして参りました。

この間、学生時代には、アイスホッケー部に所属し、医大祭実行委員として第1回の医大祭に関わり、医師国家試験対策委員長として、同級生の協力を得ながらその役割を果たして参りました。

病理学講座に入局後は、病理解剖の技術習得に励み、当時、年間140を数え、多い時には、180を超える解剖実施に従事し、臨床病理検討会の開催、報告書の作成をし

て参りました。また、興味ある症例に関しては、日本病理学会での症例発表、症例報告として雑誌への投稿と、その責務を果たすことができたと思っております。

研究面での思い出は、愛知県がんセンターでの2年間の研究の結果、Journal of Experimental Medicine (JEM) への掲載が叶い、それをきっかけに、アメリカ、サンフランシスコにあるスタンフォード大学に研究留学(1989-1990年)ができたことです。更に、帰国後は、更に消化管の虚血再灌流傷害について、独自の研究を行えたことです。

教授就任後は、円滑な講座運営を念頭に、学生教育に邁進し、また、医療安全調査機構のメンバーとして、社会貢献もできたかと思えます。

これら数々の活動は、愛知医科大学の一員だからこそ経験できたことであり、私にとって貴重な財産となりました。今後、本学の益々の発展を祈念して、ごあいさつといたします。



**塩見 利明 先生**  
(睡眠科・教授)

### 愛知医科大学47年

私は、昭和47年に18歳で第1期生として本学医学部に入学し、24歳で医師となり、旧第三内科に入局させて頂き、学生時代と合わせると延べ47年間もここで過ごさせて頂きました。退職を迎えて一言だけ述べるとすれば、それは大学関係者のすべての方々に対する「感謝」です。いまだから素直に言えるのですが、

- (1) 愛知医科大学に入学してよかった。
- (2) “臨床研究者”になれてよかった。
- (3) 大学にズーッと残れて嬉しかった。
- (4) 睡眠の研究と診療はとても楽しかった。

私が入学した頃の建学の精神は「良き臨床医の育成」でしたが、やはり大学は本物の学問をやる場所であったと思います。あと3年後の2022年に創立50周年を迎えますが、更に次は100周年を目指して本学が良き臨床研究家を育成し続けて無限に発展することを願っています。

皆さま47年間お世話になりました本当にありがとうございました。



**高安 正和 先生**  
(脳神経外科学講座・教授)

### 定年退職に当たって

平成18年4月に本学に赴任し、平成の終わる今年の3月に定年退職いたします。おかげさまで13年間充実した日々を過ごすことができました。この間、平成22年からは愛知医科大学病院副院長、23年から医療安全管理室長、24年から脊椎脊髄センター長など多くの病院業務に関わらせて頂きました。特に医療安全管理室長は当初、私に

できるものか不安も抱きましたが、幸い医療安全管理室の熱心で優秀なスタッフと病院の皆さんの協力のおかげで8年間勤め上げることができました。医療安全の重要性は年々高まっておりますのでこれからも皆さまのご協力をお願いいたします。

また、脳神経外科学講座も順調に発展にしており、専門分野である脳血管障害、脳腫瘍、脊椎脊髄外科など充実しておりますので、今後ともご紹介よろしくお願いたします。今後は、一臨床医として県内の病院に勤務し、一人でも多くの患者さんに満足して頂けるよう努力したいと考えています。

本学の益々の発展を心からお祈りしております。



**横尾 和久 先生**  
(形成外科・教授)

### 定年退職のごあいさつ

平成31年3月末をもちまして、愛知医科大学を退職することとなりました。私は、昭和62年に本学に着任し、平成18年4月から13年間にわたって、教授を担当いたしました。ほぼ平成の時代と重なる31年余りを愛知医科大学で過ごしたことになります。平成2年に形成外科が診療科として独立した当初は、初代青山久教授以下わずか

4名のスタッフでしたが、年々入局希望者が増えて今では13名を擁するまでになりました。同門会員も総勢72名を数えます。

火災により全身熱傷を負った5歳の子供を培養表皮移植により救命できたことは、報道でも大きく取り上げられ思い出に残ります。有能なスタッフにも恵まれ、乳癌や頭頸部癌を始めとする悪性腫瘍切除後の再建では、外科系全科の要望に対応可能な体制作りができました。大学の全面的なバックアップなしには実現できなかったことばかりです。この場をお借りしまして心より御礼申し上げます。



**衣斐 達 先生**  
(病態治療学・教授)

### 退職のごあいさつ

平成31年3月31日をもちまして、愛知医科大学を退職いたします。両学部を通して34年間、人生の半分以上を大学で勤めることができたことは、数多くの皆さまのご支援の賜物と感謝申し上げます。

昭和60年4月に神経内科医として医学部第四内科講座に講師として着任し、その後内科学講座の再編により、神経内科で助教授として、臨床、教育、臨床筋病理に関

する研究を行ってきました。

平成8年4月からは看護学部病態治療学の教授に就任しました。学部教育は専門の神経内科以外に内科その他の臨床科、生理学、生命倫理、人間学などの授業を担当し知識を広げることができました。そして、教務学生部長、学部長、学部長補佐、評議員、理事を拝命し、学部及び大学運営に加わることができ、とても貴重な経験をさせて頂きました。

今後益々少子高齢化時代が進み、大学及び病院に厳しい状況が推察されますが、看護学部・医学部・病院を併設していることを利点とし、本学の今後益々のご発展を祈念申し上げます。



黒田 幸恵 さん  
(看護部・副部長)

母校である愛知医科大学病院での40年間、大過なく勤められたのは、皆さまのご支援のおかげと深く感謝しております。愛知医科大学がこれからも魅力的な大学であり続けられることを心より願っています。



杉浦 信夫 先生  
(分子医科学研究所・准教授)

企業からの派遣も含めて、31年間に愛知医科大学で過ごし、それなりの研究成果を出し、大学の教職員として定年を迎えられるとは、思ってもいませんでした。皆さまのご活躍をお祈りいたします。



杉江 直美 さん  
(看護部・副部長)

皆さまのお力添えのおかげで、非常によい看護師生活を送ることができました。皆さまに感謝しお礼申し上げます。愛知医大そして皆さまのご活躍を祈念いたしております。



松岡美喜子 さん  
(メディカルクリニック看護科・看護師)

平成4年4月メディカルクリニックに入職し27年、無事に定年を迎えることができました。健康に恵まれ、多くの方に支えられて定年まで仕事をするのができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

(50音順)

## 地域がん診療連携拠点病院・ がんゲノム医療連携病院に指定

愛知医科大学病院は、専門的ながん医療の提供、がん診療の地域連携協力体制の構築、がん患者・家族に対する相談支援及び情報提供等を行っており、平成31年4月に「地域がん診療連携拠点病院」と「がんゲノム医療連携病院」に指定されました。

近年、免疫チェックポイント阻害薬や遺伝子導入T細胞(CAR-T)療法などが保険適応になり、更に遺伝子パネル検査によるがんゲノム診療が始まるなど、がん治療は急速に変化しています。一方、信頼できるがん情報

をうまく取り入れることができず、多くの患者さんや家族が不安で悩んでいます。

本院では、相談支援センターや緩和ケアセンターにおいて、がんに関する様々な相談や自分らしく生きるための支援を行っています。がん対策基本法に従い、医学の進歩に貢献するだけでなく、高齢者など本人の意向を尊重した治療を選択し、がん患者さんが円滑な社会生活を送れるように支援していきます。どうぞ宜しく願い申し上げます。

## 救命救急センターの充実段階評価 県内最高得点で「S評価」

本院救命救急センターは、平成31年3月25日(月)に厚生労働省が発表した救命救急センターの評価結果(平成30年度)において「97点」を獲得し、4段階の評価のうち最も高い「S評価」(愛知県内最高得点)を頂きました。

救命救急センターの充実段階評価は、厚生労働省が充実度を評価することにより、個々の救命救急センターの機能の強化、質の向上を促し、もって全国の救急医療体制の強化を図ることを目的として実施されています。

各救命救急センターからの診療体制や患者受入実績等

に関する報告に基づき、「評価項目」と「是正を要する項目」に区分して点数化をし、その合計点数を基に各施設の充実段階を「A・B・C」に区分されて実施されていましたが、平成30年度に新たに「S」評価が創設されました。

なお、今回の評価は、全国289か所の救命救急センターを対象としており、S評価:68機関、A評価:217機関、B評価:4機関、C評価:0機関の結果となりました。

## 卒後臨床研修修了証授与式挙行

平成31年3月11日（月）午後6時から、大学本館711特別講義室において、卒後臨床研修修了証授与式が挙行されました。【写真】

式は、羽生田正行病院長を始め、佐藤啓二学長、春日井邦夫卒後臨床研修センター長及び副センター長等が出席の中、整然と且つ厳かに執り行われました。

初めに、春日井センター長から「チームワーク良く助け合い、病院を支えてくれたことに感謝します。2年間に培った知識、技術、友情を忘れることなく、本院での研修を誇りに今後羽ばたいてほしい。」との告辞があり、各出席者からの祝辞の後、春日井センター長から一人ひとりに修了証が手渡されました。

今回修了した23名（研修医20名、研修歯科医3名）のうち、研修医18名、研修歯科医2名が本院の専修医として、専門医や学位取得を目指すことになります。本院で



の臨床研修の経験を生かし、より一層精進されることが期待されます。

## 若葉ナース卒業式挙行

平成31年2月21日（木）午後5時30分から大学本館レストランオレンジにおいて、若葉ナース卒業式が挙行されました。

この式は、今年度で9回目となり、本院に入職した新卒看護職員が1年間を振り返るとともに、指導に当たった全ての先輩と互いに成長を祝う会となっています。国家資格を取得し、初めて本院に入職した新卒看護職員を「若葉ナース」と呼び、名札には初心者マークを付けて看護実践に携わっていますが、この卒業式をもって初心者マークから卒業します。

式では、井上里恵看護部長から新しい名札とともに、若葉ナースコース研修を終えた初めてのクリニカルリーダー（JNAリーダー統合版）I認定証が手渡され、各部署の新人教育担当者に対しては、労いの言葉が掛けられました。

卒業を迎えた若葉ナースの代表者から、自己の一年間を振り返り新人教育に携わって頂いた先輩に向けて、「たくさんの学びには辛かった時期もありながら、その困難も先輩方のお陰で乗り越えることができ、成長することができました。」と感謝の気持ちが伝えられ、感極まる時間を過ごすことができました。



卒業式の様子



お世話になった先輩への感謝のこたば

## 新規採用医師ガイダンス開催

新規採用医師ガイダンスが、平成31年4月1日（月）に開催されました。対象者は4月1日付け新規採用医師、帰局医師及び新規採用臨床研修医で計99名が受講しました。

このガイダンスは、平成22年度から医療安全を始めとする主な院内ルールの周知徹底を目的に開催しており、藤原祥裕病院長による「辞令交付」と「病院の概要及び経営方針」の説明や、各部門の責任者から院内主要部署

の業務内容、救急医療体制、医療安全管理、感染予防対策、プライマリケアセンターの役割などについてのガイダンスが集中的に行われました。ガイダンスの内容は、日常の診療に直ちに反映されるものばかりであり、参加した医師は真剣な表情で受講していました。

今後、年度途中の入職医師については、今回の講義内容を録画したDVDを視聴することにより、ガイダンスに充てることとしています。

## 臨床研修医ガイダンス開催

平成31年4月1日（月）～6日（土）まで、新規採用研修医28名及び研修歯科医3名を対象に、本院における臨床研修に必要な基本的な事項についての「臨床研修医ガイダンス」が開催されました。

ガイダンスは、中野正吾卒後臨床研修センター長、専任教員・高橋美裕希副センター長を始めとする各副センター長から、医師としての心構え等についての講話から始まりました。

続いて、電子カルテの操作方法講習やBLS（一次救命処置）講習において、質問への対応や助言、手助けなど、常に先輩の医師が後輩の医師に対応する、いわゆる「屋根瓦方式」の研修が行われました。

最後に中野センター長から、臨床研修医一人ひとりに臨床研修許可証が手渡され、6日間のガイダンスが終了



31名の新規研修医

しました。このガイダンスの内容は、参加した臨床研修医にとって将来必ず役立つものと期待されます。

## 医療安全講習会開催

### ～ACPと本院の医療安全体制～

平成31年3月6日（水）大学本館たちばなホールにおいて、全病院職員を対象とした医療安全講演会が開催されました。

今回のテーマは、公立福生病院（東京都福生市）の人工透析治療を巡り、医療安全の視点からも注目を集めている「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセス（ACP）」、「当院における医療安全管理について」の2題で開催されました。当日は518名の出席があり、出席できなかった病院職員には、DVDの貸出を行っています。

講演では、医療安全管理委員会の山口悦郎委員から、ACPについて厚生労働省の発出したガイドラインを基に、平成30年7月に医療安全管理委員会からワーキングを立ち上げ、部長会、倫理委員会の承認を得るまでの経緯を交えて説明がありました。

人生の最終段階の定義を始めとし、方針の決定プロセスは、患者本人による意思決定を基本とすること、本人の意思は確認できないが、家族等が本人の意思を推定できる場合には、その推定意思を尊重し、本人にとって最善の方針を家族と医療チームが一緒になって繰り返し検討することが重要であること。また、生命維持治療の不開始・低減・中止・DNAR・水分栄養補給法についての定義・対象患者・同意取得手順やカルテ記載の重要性な



講演する山口委員



講演する杉本副室長

ど詳細な説明がありました。

また、本院における医療安全管理については、医療安全管理室の杉本郁夫副室長から、医療法で特定機能病院における職員研修として義務付けられている項目について説明がありました。インシデント・アクシデント報告による改善例を初めとし、医療安全に対する職員の意識調査の結果、監査委員会からの指摘事項、本院で承認されている高難度新規医療技術の経カテーテル的動脈弁置換術「TAVI」などの紹介、未承認新規医薬品の使用状況のほか、医療安全文化を根付かせ、安心で安全な医療を提供できる病院として、今後目指すべき医療安全対策について講演がありました。

## 平成30年度第2回保険診療に関する講習会開催

臨床研修病院においては、全職員を対象とした保険診療に関する講習が、年2回以上実施されていることが必須とされており、平成30年度第2回保険診療に関する講習会が、平成31年3月29日（金）午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて開催されました。

講習会のテーマは、「第一部：病棟看護部門の施設基準」、「第二部：適時調査の対応を振り返って」と題して、株式会社ソラストの加藤慶一氏及び志賀靖樹氏からそれぞれご講演を頂きました。特に入院基本料については、

病院収入を占める割合が多いため、施設基準のルールを正しく理解し、運用することが病院経営の鍵となってきます。他部門と連携をとりながら、施設基準の管理を適正に行い、正確な診療報酬を請求することが求められます。

講演会には、医師、看護師、メディカルスタッフ及び事務職員など幅広い職種から142名の参加があり、施設基準の重要性を再認識した講習会となりました。

メディカルクリニックだより

## メディカルクリニック講演会開催

平成31年2月9日（土）、3月16日（土）、4月20日（土）の計3回にわたり、愛知医科大学メディカルクリニック1階ロビーにおいて講演会が開催されました。【写真】

様々なテーマで開催される講演会には、毎回20名前後の参加があり、60名を超えた回もありました。各分野専門の医師が病気の原因やその治療方法などを解説し、講演会終了後には希望者に対して個別相談会も開かれました。

メディカルクリニックでは、今後も地域の方々に向けての講演会を開催し、クリニックの知名度・認知度向上を図っていきます。



日時	講演テーマ	講師
2月9日（土）	本当に怖い糖尿病の合併症 －合併症を起こさないためにできること－	近藤正樹（糖尿病内科・講師）
3月16日（土）	逆流性食道炎のお話	河村直彦（消化管内科・講師）
4月20日（土）	正しいスキンケアと新しいニキビ治療	吉田真紀子（皮膚科・医師）

## SD「マインドフルネス研修」実施

平成31年2月12日（火）午後5時45分から立石プラザ3階交流ラウンジにおいて、運動療育センターの若林淑子事務長を講師として、SD研修として「マインドフルネス研修」を行いました。【写真】

「マインドフルネス」は、GoogleやAppleを始めとした先進的企業で導入され、社員の革新を促すためのアプローチとして注目されています。国内においても「生産性向上」、「健康経営」を推進する企業において導入が進められています。

今回のSD研修には教職員8名が参加し、マインドフルネス瞑想に関する講義と実践指導を通して、集中力アップやストレスコントロールのスキル習得を行いました。

参加者からは「分かりやすい講義で、自分のことを考えるととても充実した時間だった。」「雑念を消すのは難



しいが、とても気持ち良かったので続けてみたい。」「シリーズ化してもらい、色々な瞑想を体験したい。」といったコメントがありました。

## 総合学術情報センター各種講演会開催

平成31年2月～3月に総合学術情報センター（図書館部門）主催による講演会が「論文執筆」、「ポスター発表」、「診療支援」の三つをテーマにそれぞれ開催され、教職員を中心に延べ72名の参加がありました。

○2月28日（木）開催

国際交流センターとの共催で、英語論文執筆セミナー「英語論文執筆スキル」を開催し、エダンズグループジャパン株式会社エディターのAyli Chong先生を講師に、効果的な英語論文執筆について解説して頂きました。

○3月8日（金）開催

個別指導「学術分野における『伝わる』ポスターの作り方」を開催し、金城学院大学の遠藤潤一先生を講師として、読者に伝わるポスターの作り方について指導して頂きました。

○3月14日（木）開催【写真】

セミナー「患者説明・研究発表のためのメディカルイラストレーション講習会」を開催し、立命館大学共通機



原木先生による講習会

構推進機構の原木万紀子先生を講師に、患者に伝わるメディカルイラストレーションの描き方やオンライン上の画像の使い方について解説して頂きました。

今後も、総合学術情報センターでは、講習会を開催し、教職員、学生をサポートしていきます。

## ICT活用教育に係る講演会開催

総合学術情報センター（ICT支援部門）では、平成31年3月6日（水）に医学教育センターと共催でICT活用教育に係る講演会を開催し、教員32名、職員11名（計43名）に参加頂きました。【写真】

講師には、自治医科大学情報センター IR部門の浅田義和講師をお招きし、「医学・看護学教育におけるICT活用教育について～Moodle、Mahara等の活用～」と題して、eラーニングシステム（Moodle、Mahara）の各種機能の説明及び自治医科大学の活用事例を中心に、医学、看護学分野における今後のICT活用教育の重要性についてご講演を頂きました。

講演では、ICT教育及びTEL（Technology Enhanced Learning）において、教育目標等の実現のために効果的にツールを利用することが重要であること、更には、世の中に様々なツールがあるが、ツールにこだわり過ぎて、学生も教員も使いこなせないような状況に陥らないことが重要であると説明がありました。



総合学術情報センター（ICT支援部門）では、今後も、eラーニングシステム（Moodle、Mahara）のサポートを通じて、授業や自学自習における学修支援を行うとともに、大学教育におけるICTの効果的な利活用に向けて各種セミナーを開催していきます。

## 情報セキュリティに関する講演会開催

平成31年2月26日（火）午後5時30分から大学本館5階マルチメディア教室において、全学を対象とした情報セキュリティに関する講演会を開催し、教職員等39名が聴講しました。

今年度は、SOMPOリスクマネジメント株式会社サイバーセキュリティ事業本部上級コンサルタントの井口洋輔氏を講師に迎え、「個人情報の取扱いについて～事例から見る対策ポイント～」と題して、個人情報の定義から取扱いのポイントについて、事例等を交えて講演して頂きました。

会場からは、学生や患者等の個人情報に関する取扱いについて質問が出されるなど、出席された方々は、情報通信サービスの変化によって重要性が高まっている情報セキュリティの在り方について、熱心に聞き入っていました。

本学では、引き続き情報セキュリティに関する啓蒙活動を実施し、情報漏えいが発生しないよう、教職員及び学生への意識啓発に努めることとしています。

## 運動療育センター講演会開催

平成31年3月9日（土）大学本館たちばなホールにおいて、運動療育センター講演会が開催されました。【写真】

まず、運動療育センターの牛田享宏センター長から「からだの痛みとその不思議」と題して、心とからだの関係について日頃は聞くことのできない興味深い講演があり、引き続き、運動療育センターの新井健一准教授から「知ってますか 腸内細菌叢」と題して、腸内細菌叢と病気や痛みについて、健康の維持増進に役立つ講演が行われました。

この他にも運動療育センターの紹介や抽選会も行われ、会場は終始和やかな雰囲気になりました。

この運動療育センター講演会は、毎年開催されていますが、今回は325名もの方にご参加頂き、会場は講演を熱心に聴く方々の熱気にあふれ、大盛況となりました。

今後も、運動療育センターは、地域の方々の健康づくりに少しでもお役に立てるよう努めて参ります。



## 解剖学講座 長谷川香織助手 医学教育等関係業務功労者表彰受賞

解剖学講座の長谷川香織助手【写真】が、平成31年3月6日（水）に文部科学大臣から、医学又は歯学に関する教育、研究若しくは患者診療等に係る補助的業務に関し、顕著な功労のあった方々に授与される、医学教育等関係業務功労者表彰を受賞されました。

表彰を受けられた長谷川助手からは、「この度は、このような栄誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。昭和57年に愛知医科大学に採用され、解剖学講座各先生のご指導を始めとして、多くの講座の方々のご支援、ご協力により受賞できたものと感謝しております。今後もこの栄誉を励みとし、より一層の精進を重ねていきたいと思っております。これからも、愛知医科大学の更なる発展をお祈り申し上げます。」と受賞の喜びと感謝の言葉がありました。



## 施設・建設室 伊藤聖志課長 省エネ活動事例紹介発表

平成31年1月23日（水）中電ホールにおいて、中部経済産業局の主催により開催された「平成30年度エネルギー使用合理化シンポジウム」において、施設・建設室の伊藤聖志課長【写真】が、優良事業所表彰を受けた省エネ活動事例として、「大規模病院におけるエネルギー見える化」と題し、事例紹介発表を行いました。

発表した伊藤課長から「本学は平成28年度省エネ大賞（省エネ事例部門）省エネルギーセンター会長賞を受賞しており、本学の省エネに関する先進的な取り組みと、受賞後もエネルギーの削減が進んでいることを発表することができました。省エネルギーは我慢ではなく無駄を省くことにあります。また、今年度より大学への省エネルギーベンチマーク制度が導入されましたので、より一



層の省エネルギー活動の推進とご協力をお願いします。」と感想がありました。

## 医学教育センター 早稲田勝久教授（特任） Asia Pacific Medical Education Conference Merit Award受賞

医学教育センターの早稲田勝久教授（特任）【写真】が、平成31年1月12日（土）シンガポールで開催されたAsia Pacific Medical Education Conferenceにおいて、Merit Awardを受賞しました。

これは、同会において早稲田教授（特任）が発表した「Relationship Between Academic Record and Self-Assessment of Competencies Through 6-Year Medical Education Program（卒業時の成績と卒業時修得すべきコンピテンシーの達成度との関係）」が高く評価され、Merit Awardとして選定されました。

表彰を受けた早稲田教授（特任）から「本学は現在、分野別認証受審に向け教育改革を行っています。今回はその取り組みの一部をまとめ、発表させて頂きました。医学教育を取り巻く問題は、海外でも多くの施設で同じような課題を抱えていることを今回の発表を通して感じました。今回の受賞は、会場の多くの参加者と十分に議論し発表できたことが評価されたと思っています。発表



に際し多くの助言を頂いた伴信太郎教授を始めとする医学教育センタースタッフ、関係者の皆さまに感謝します。」との感想がありました。

## 学際的痛みセンター 井上真輔准教授（特任） 第11回日本運動器疼痛学会 優秀演題賞受賞

学際的痛みセンターの井上真輔准教授（特任）が、平成30年12月1日（土）・2日（日）びわ湖ホール・ピアザ淡海において開催された第11回日本運動器疼痛学会において、優秀演題賞を受賞しました。

これは、同会において査読を経て選ばれた201演題の中、井上准教授（特任）が発表した「治療に難渋する運動器慢性疼痛に対する集学的慢性痛マネジメントプログラムの効果」が高く評価され、優秀演題賞として選定されました。

表彰を受けた井上准教授（特任）から「第11回日本運動器疼痛学会にて優秀演題賞を受賞することができました。治療チーム全員の情熱と努力、そして愛知医科大学及び大学病院の多大な協力支援により、このような素晴らしい賞を頂くことができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。今回の受賞を励みにして、長く痛みに苦しむ患者さんのお役に立てるようこれからも頑



表彰式での記念撮影 井上准教授（特任）（左）

張っていきたいと思います。」との感想がありました。

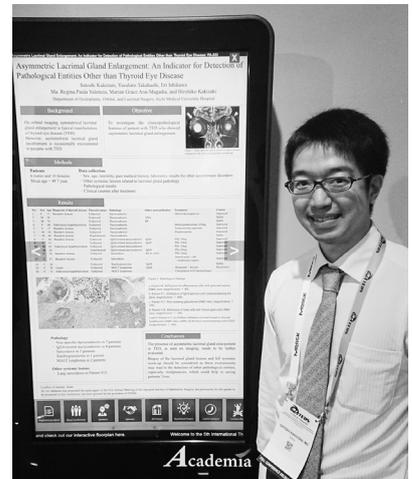
## 眼形成・眼窩・涙道外科 角谷 聡助教 5th International Thyroid Eye Disease Society Symposium 優秀ポスター発表賞受賞

眼形成・眼窩・涙道外科の角谷聡助教【写真】が、平成31年2月20日（水）～23日（土）シンガポールで開催された5th International Thyroid Eye Disease Society Symposiumにおいて、優秀ポスター発表賞（第2位）を受賞しました。

これは、同会において角谷助教が発表した「Asymmetric Lacrimal Gland Enlargement: An Indicator for Detection of Pathological Entities Other than Thyroid Eye Disease」が高く評価され、優秀ポスター発表賞として選定されました。

表彰を受けた角谷助教から「初めての国際学会で賞を頂くことができました。御指導頂きました柿崎裕彦教授、高橋靖弘准教授、眼形成・眼窩・涙道外科の医局員・留

学生の皆さまに感謝いたします。今回の受賞の経験を今後の臨床・研究に生かしていきたいと思っております。」との感想がありました。



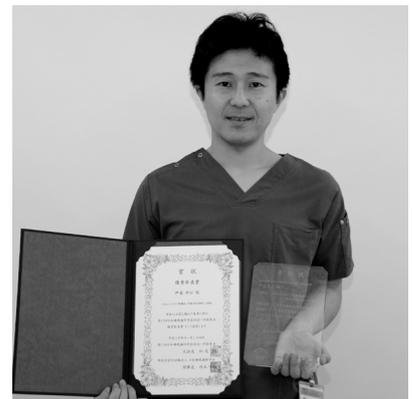
## 歯科口腔外科 伊藤邦弘助教 第17回日本睡眠歯科学会総会・学術集会 優秀発表賞受賞

歯科口腔外科の伊藤邦弘助教【写真】が、平成30年11月23日（金・祝）・24日（土）つくば国際会議場において開催された第17回日本睡眠歯科学会総会・学術集会において、優秀発表賞を受賞しました。

これは、同会において行ったポスター発表「OSAにおける口腔機能と栄養学的指標との関係」が高く評価され、優秀発表賞として選定されました。

表彰を受けた伊藤助教から「今回は第17回日本睡眠歯科学会総会・学術集会において優秀発表賞を受賞し、とても驚いております。睡眠歯科の分野において、このような賞を受賞することができ、大変うれしく、光栄に思

います。改めて、臨床、研究含めより一層気持ちを引き締めていきたいと思っております。」との感想がありました。



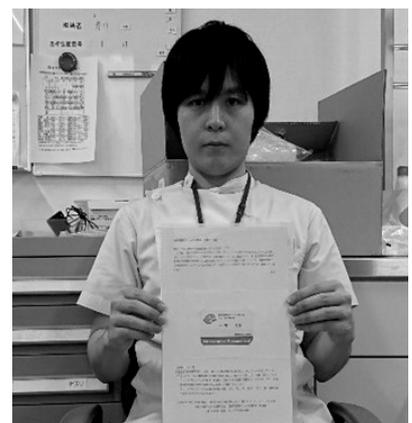
## 臨床工学部 鴨下方彦臨床工学技士 周術期管理チーム認定臨床工学技士資格取得

臨床工学部の鴨下方彦臨床工学技士【写真】が、「周術期管理チーム認定臨床工学技士」の資格を取得されました。

この資格は、日本麻酔科学会による周術期診療の質の向上を目指して提唱した「周術期管理チーム」の認定資格であり、認定には、臨床工学技士免許を取得以降、手術室、周術期管理センターまたは集中治療部（救急部門を含む）臨床経験が3年以上あり、周術期管理に関する相当の知識と経験を有することが条件となっています。

資格を取得した鴨下技士から「周術期管理チームにおける臨床工学技士の役割は、より高度で専門的になった

周術期領域での医療機器に関して、医療機器の専門職の立場から医師や看護師の質的・量的不足を補い、より安全な周術期医療の提供に力になればと考えています。」との感想がありました。



# 学 術 振 興

## 学 位 授 与

### ◆大学院医学研究科



足立 和規

学位授与番号 甲第525号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「Gut microbiota disorders cause type 2 diabetes mellitus and homeostatic disturbances in gut-related metabolism in Japanese subjects (日本人における腸内細菌の乱れは2型糖尿病やホメオスタシスの障害を引き起こす)」



岩田 力

学位授与番号 甲第526号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「The G2 checkpoint inhibitor CBP-93872 increases the sensitivity of colorectal and pancreatic cancer cells to chemotherapy (G2チェックポイント阻害剤であるCBP-93872は大腸癌および膵臓癌細胞株に対する抗癌剤の感受性を増加させる)」



大澤 高陽

学位授与番号 甲第527号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「Bile Leakage After Hepatectomy for Liver Tumors (肝腫瘍切除後の胆汁漏に関する検討)」



田口宗太郎

学位授与番号 甲第528号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「Motor improvement-related regional cerebral blood flow changes in Parkinson's disease in response to antiparkinsonian drugs (抗パーキンソン病薬への反応性からみたパーキンソン病の運動症候改善に連関する局所脳血流変化)」



竹内 伸行

学位授与番号 甲第529号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「New paradigm for auditory paired pulse suppression (聴覚ペアパルス抑制の新規パラダイム)」

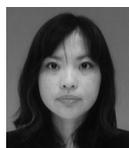


松本 麻未

学位授与番号 甲第530号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「Characterization of the vaginal microbiota of Japanese women (日本人女性における膣内細菌叢の特徴)」



守田 紀子

学位授与番号 甲第531号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「Effect of the methanol extract of the Lion's Mane mushroom, *Hericium erinaceus*, on bone metabolism in ovariectomized rats (ヤマブシダケ摂取が卵巣摘出ラットの骨代謝に及ぼす影響)」



吉峰 崇

学位授与番号 甲第532号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「Convenient Method of Measuring Baseline Impedance for Distinguishing Patients with Functional Heartburn from those with Proton Pump Inhibitor-Resistant Endoscopic Negative Reflux Disease (簡便なベースライン・インピーダンス測定法による機能的胸やけの診断)」



林 音知

学位授与番号 甲第533号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「Isolation of ketomycin from *Actinomycetes* as an inhibitor of 2D and 3D cancer cell invasion (放線菌由来ケトマイシンによる2Dおよび3Dがん細胞浸潤の抑制)」

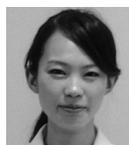


Md. Wahiduzzaman

学位授与番号 甲第534号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「Novel combined Ato-C treatment synergistically suppresses proliferation of Bcr-Abl-positive leukemic cells *in vitro* and *in vivo* (三酸化ヒ素とシスプラチンの新規併用療法 Ato-CはBcr-Abl陽性白血病細胞に対して相乗的な増殖抑制作用を示す)」



清水 沙希

学位授与番号 甲第535号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「Royal jelly dose not prevent bone loss but improves bone strength in ovariectomized rats (ローヤルゼリーは卵巣摘出ラットにおいて骨量減少を抑制しないが骨強度を改善する)」



安藤 孝人

学位授与番号 甲第536号

学位授与年月日 平成31年3月2日

論文題目：「Pre-operative planning using Real-time Virtual Sonography, an MRI/ Ultrasound image fusion technique, for breast-conserving surgery in patients with non-mass enhancement on breast MRI: A preliminary study (乳房造影MRIにおいて非腫瘍病変を示す乳癌患者の乳房部分切除術におけるMRI/超音波同期システムのリアルタイムバーチャルソノグラフィーを用いた術前検査法)」



**岡田 学**

学位授与番号 甲第537号  
学位授与年月日 平成31年3月2日  
論文題目：「Favorable results in ABO-incompatible renal transplantation without B cell-targeted therapy: Advantages and disadvantages of rituximab pretreatment (B細胞標的治療を伴わないABO不適合腎移植の良好な成績：リツキシマブの長所と短所)」



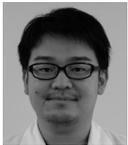
**柴田 祐一**

学位授与番号 甲第538号  
学位授与年月日 平成31年3月2日  
論文題目：「Caspofungin versus micafungin in the incidence of hepatotoxicity in patients with normal to moderate liver failure (正常から中等度の肝不全患者におけるカスポファンギン対ミカファンギンの肝毒性の発生率)」



**舩石 俊樹**

学位授与番号 甲第539号  
学位授与年月日 平成31年3月2日  
論文題目：「FOLFOX as First-line Therapy for Gastric Cancer with Severe Peritoneal Metastasis (高度腹膜転移胃癌に対する1次治療としてのFOLFOX療法)」



**山地 雅之**

学位授与番号 甲第540号  
学位授与年月日 平成31年3月14日  
論文題目：「Novel ATP-competitive Akt inhibitor afuresertib suppresses the proliferation of malignant pleural mesothelioma cells(新規ATP競合性AKT阻害剤アフレサーティブは、悪性胸膜中皮腫細胞の増殖を抑制する)」



**川口 礼雄**

学位授与番号 甲第541号  
学位授与年月日 平成31年3月14日  
論文題目：「Expressions of Eotaxin-3, Interleukin-5, and Eosinophil-Derived Neurotoxin in Chronic Subdural Hematoma Fluids (慢性硬膜下血腫におけるEotaxin-3、Interleukin-5、Eosinophil-Derived Neurotoxinの発現と血腫成熟との関連)」



**浅井 信博**

学位授与番号 甲第542号  
学位授与年月日 平成31年3月14日  
論文題目：「CCR4 expression in tumor-infiltrating regulatory T cells in patients with squamous cell carcinoma of the lung: A prognostic factor for relapse and survival (肺扁平上皮癌患者の腫瘍浸潤制御性T細胞におけるケモカイン受容体4の発現：再発と生存の予後因子)」



**村松 洋行**

学位授与番号 甲第543号  
学位授与年月日 平成31年3月14日  
論文題目：「Targeting lactate dehydrogenase-A promotes docetaxel induced cytotoxicity predominantly in castration-resistant prostate cancer cells (去勢抵抗性前立腺癌における、LDHA阻害薬とドセタキセルの併用投与による抗腫瘍効果の検討)」



**手塚 剛彦**

学位授与番号 乙第395号  
学位授与年月日 平成31年2月21日  
論文題目：「The plant alkaloid conophylline inhibits matrix formation of fibroblasts (植物アルカロイドコノフィリンは線維芽細胞のマトリックス形成を阻害する)」



**西村 るみ子**

学位授与番号 乙第396号  
学位授与年月日 平成31年3月20日  
論文題目：「Effects of catechin-enriched ion beverage intake on thermoregulatory function in a hot environment (暑熱環境下における高濃度茶カテキン飲料の体温調節への影響)」

◆大学院看護学研究科



**大野 誉子**

学位授与番号 第109号  
学位授与年月日 平成31年3月2日  
論文題目 「特別養護老人ホームにおける薬剤耐性菌に関する感染対策と地域連携の実態調査」



**加藤 千洋**

学位授与番号 第110号  
学位授与年月日 平成31年3月2日  
論文題目 「動機づけ面接の研修が助産師の妊婦禁煙指導の認識に与えた影響」



**佐藤 浩二**

学位授与番号 第111号  
学位授与年月日 平成31年3月2日  
論文題目 「ICU看護師の中心静脈カテーテルケアにおける手指衛生の実態と課題」



**鈴木 美子**

学位授与番号 第112号  
学位授与年月日 平成31年3月2日  
論文題目 「自己指向性と他者指向性の双方向からみた看護師の共感性の特徴」

**加藤 直輝**

学位授与番号 第113号  
 学位授与年月日 平成31年3月2日  
 論文題目 「ICU看護師の痛みに対する鎮痛剤使用の判断基準」

**林田 牧人**

学位授与番号 第117号  
 学位授与年月日 平成31年3月2日  
 論文題目 「平時における体幹部大量出血の止血術に対する手術準備器械・器材調査」

**志水 己幸**

学位授与番号 第114号  
 学位授与年月日 平成31年3月2日  
 論文題目 「病棟看護師による高齢者への在宅酸素療法指導における初期段階アセスメントの実施状況と必要性の認識」

**吉家 直子**

学位授与番号 第118号  
 学位授与年月日 平成31年3月2日  
 論文題目 「特定行為研修受講の必要性に対する認識－地域の訪問看護ステーションに所属する施設管理者と訪問スタッフの比較調査－」

**田中 里佳**

学位授与番号 第115号  
 学位授与年月日 平成31年3月2日  
 論文題目 「脳血管障害をもつ患者の生活の再構築に向けた看護師の意思決定支援の体験」

**鈴木 拓郎**

学位授与番号 第119号  
 学位授与年月日 平成31年3月29日  
 論文題目 「日本のへき地医療問題に関する文献検討」

**中尾 幸世**

学位授与番号 第116号  
 学位授与年月日 平成31年3月2日  
 論文題目 「介護老人保健施設入所者に関する看護師と家族間の情報共有と看護師の役割意識・属性の関係性」

## 研究助成等採択者

## ○平成30年度公益社団法人日本透析医会公募研究助成

氏名 鬼無洋（内科学講座（腎臓・リウマチ膠原病内科）・講師）  
 研究題目 腹膜透析に伴う腹膜リンパ管新生におけるCTGFの意義の解明  
 助成金額 1,700,000円

## ○公益財団法人大幸財団 第36回学会等開催助成

氏名 岩瀬敏（生理学講座・教授（特任））  
 学会名称 第40回国際重力生理学学会・宇宙生命医学学術集会

助成金額 260,000円

氏名 伊藤恭彦（内科学講座（腎臓・リウマチ膠原病内科）・教授）

学会名称 第9回国際腹膜透析学会アジア・太平洋大会（APCM-ISPD2019）

助成金額 400,000円

氏名 小林孝彰（外科学講座（腎移植外科）・教授）

学会名称 第28回日本組織適合性学会大会

助成金額 200,000円

## ○第28回公益財団法人堀科学芸術振興財団

第4部（医学の部）研究助成

氏名 池本竜則（整形外科学講座・講師）  
 研究題目 心理療法とプラセボ錠とを併用した慢性疼痛治療法の開発  
 助成金額 1,000,000円

## ○公益財団法人コスメトロジー研究振興財団

2019年度学術集会支援助成

氏名 渡辺秀人（分子医科学研究所・教授）  
 学会名称 第11回プロテオグリカン国際会議  
 助成金額 500,000円

# 規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

## 副学長規程の一部改正

愛知医科大学副学長規程の一部が改正され、副学長の数及び任期が改められました。

施行日は平成31年4月1日

## 自己点検・評価委員会規程の一部改正

愛知医科大学自己点検・評価委員会規程の一部が改正され、自己点検・評価委員会の委員構成が改められました。

施行日は平成31年4月1日

## 「公的研究費等の適正な運営及び管理に関わる研究用物品の発注及び納品検収業務について」の一部改正

平成31年4月1日付けで「公的研究費等の適正な運営及び管理に関わる研究用物品の発注及び納品検収業務について」(学長裁定)の一部が改正され、研究用物品の発注及び納品検収の方法が現状に即した形に改められました。

## 医学部奨学金貸与規程の一部改正

愛知医科大学医学部奨学金貸与規程の一部が改正され、奨学金の貸与申請学年次及び返還債務免除期間等が改められました。

この改正に伴い、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成31年4月1日

### 【一部改正】

- ・愛知医科大学医学部奨学金貸与規程の選考に係る細則

## 看護学研究科履修規程の一部改正

愛知医科大学大学院看護学研究科履修規程の一部が改正され、平成31年度の授業科目、年次配当、単位数、専攻領域、履修方法等が定められました。

施行日は平成31年4月1日

## 看護学部教員選考規程の一部改正

愛知医科大学看護学部教員選考規程の一部が改正され、昇任の申請期間が年2回に改められました。

施行日は平成31年4月1日

## 「看護学部生のクラブ活動に関する活動基準について」の一部改正

平成31年4月1日付けで「看護学部生のクラブ活動に関する活動基準について」(学長裁定)の一部が改正され、3学年次後学期以降のクラブ活動に関する活動基準が明確化されました。

## 看護実践研究センター規程の一部改正等

愛知医科大学看護学部附属看護実践研究センター規程の一部が改正され、センターの部門の統合に伴う業務の整備がされました。

この改正に伴い、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成31年4月1日

### 【一部改正】

- ・愛知医科大学看護学部附属看護実践研究センターの部門の組織等に関する規程
- ・看護実践研究センター認定看護師教育課程の修了証明書及び成績証明書等の額について
- ・看護実践研究センター及び各部門の英文名称について

## 就業規則の一部改正

学校法人愛知医科大学就業規則の一部が改正され、出退勤の管理、年次有給休暇の取得時季指定に関する整備がされました。

施行日は平成31年4月1日

## エネルギーの使用の合理化に関する規程の一部改正

学校法人愛知医科大学エネルギーの使用の合理化に関する規程の一部が改正され、エネルギー管理に係る部局等を現状に合わせるための整備がされました。

この改正に伴い、次の関係規則が整備されました。

施行日はいずれも平成31年3月6日

### 【一部改正】

- ・学校法人愛知医科大学省エネルギー推進委員会規程